王国の風～a girl has a realm～

白亜迹舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王国の風〜a girl has a realm〜

【Nコード】
N5356G

【作者名】
白亜迩舞

【あらすじ】
北海道追分高専の機械工学科三年生である少年、轟・日本は、春先の札幌の街で車椅子で暴走する少女、神無・銀と「運命的」に出会う。二人の友情とも恋愛ともつかない曖昧な日常を記録した物語。時代が今より六十年くらい先の未来です。

foreword

二千七十六年十一月十三日。追分高等工業専門学校、図書館。

立冬のこの頃になると、ここ北海道は追分に建つ高専の図書館は底冷えするようになる。もう少し日にちが経てば暖房が本格的に入って暖かくなる図書館だが、その一歩手前となるこの時期は、図書館にいるのが嫌になる時期である。
「さ、さむくないか？　白崎」
私が呼んだ轟木君が言う。彼は私ほどは図書館に来る人間ではないのだろう。
「やっぱりそう思うか。……違うところに行くか？　轟木」
「――ここでいい。すぐ終わるよな？」
確かにすぐ終わる。わざわざ移動するのも面倒だ。
「で、例の話なんだけど。とりあえずまとめて見たらよ、話の順番が変な気がしたんだよな――とはメールしたけど。轟木は正確な順番がわからないとか言ったけど、結局どうしたら良い？」
私が言うと、彼はにやりとした。
「原稿、ある？　ちょっと見せて」
「あ、あぁ……」
ワープロで打ってプリントアウトした原稿を轟木に手渡す。そこに書かれているのは、私が彼に頼んで物語ってもらった、一人の少年と一人の少女の物語だ。
「へぇ……なんか綺麗にまとめてあるな。結構とりとめなく、支離滅裂に話したつもりなのに、形になってる」
轟木君は原稿をすばやくめくりながら言った。
彼の言い方だと、わざわざ支離滅裂に話してくれたかのようだ。
「……なんか恥ずかしいな」
「そういうなよ。俺だって、自分の話したことが、自分じゃない自

分に似た奴が自分のことみたいに話しているモノを読むのは変な気分だ」
私の書いた物語に登場する少年の名前は轟・大和。私の眼前に存在する轟木君とは名字の漢字が一つ少ないし、下の名前もちょっと違う。だけどその架空の人物が一人称で物語るのは、轟木君の身に起きたことを擬えたものだ。
しばし轟木君は黙したまま私の小説の原稿をめくる。私の世界に響く音は、紙がめくられる音と、いつもより少し早い自分の心音だけとなる。

「わかんないなぁ」

ようやく彼が発したのは、そんな言葉だった。
「本当かよ……。お前にわからなければ、俺はどうすれば良いんだ？」
私が嘆くように言うと、彼はくしゃりと笑って言う。
「そうは言われてもな……。あいつと過ごした時間を考えると、何が前で後なのか、そんな順番なんてどうでも良いような気がするんだよ。――このことは初めの時にも言った気がするけど。――時の流れなんて些細。思い出として筋道たてて語るなんて莫迦らしい。そんなふうにしか考えられないんだ」
「……それ、惚気ているのか？」
「その、惚気話を聞きたいって言ったのは、白崎、お前の方だろ」
こう言われては何も言うことはできない。
「で？　結局、話の順番は適当に俺が決めていいのか？」
「いや……ちょっと待ってくれ」
轟木君はもう一度原稿を手に取ると、さっきよりも更にすばやい手付きで捲りはじめた。そして、鉛筆を手に取り、原稿に書き込みをする。
やがて彼は原稿を五つに、話の区切れに従って分割して私の前に

並べた。五つの集合のそれぞれの始めの紙には、サブタイトルらしき英単語が記されていた。
「Ｍｏｏｎ，　Ａｃｈｅ，　Ｊｕｎｃｔｉｏｎ，　Ｓｌｅｅｐｉｎｇ－ｂｅａｕｔｙ，　Ｋｉｎｇｄｏｍ……もしかして、高専の学科の並べ方に合わせてある？」
「そのとおり。これでいいだろ」
　高専について詳しくない人のためにちょっと説明すると、高専には機械工学・電気電子工学・情報工学・物質工学・環境都市工学の五つの学科があり、それぞれＭ・Ａ・Ｊ・Ｓ・Ｋと略称される。五学科は並べて呼ぶとき、多くの場面で左のような順番となるのだった。
　轟木君のしたこととは、小説を五つに分割し内容にそって英単語のサブタイトルを付けた上で、時系列を無視して高専流の並べ方で話の順番を決めたということだ。
「順番としては……Ｊから始めてＡ・Ｍ・Ｋと読んで最後にＳを読むのがわかりやすいか？　轟木が話した順としてはＡ・Ｊ・Ｍ・Ｋ・Ｓだったと思うが」
「好きにすればいいんだよ。順番なんて、こっちには本当に関係のないことなんだから」
　轟木君は投げ槍に言う。
「まぁ、わかったよ。このとおりの順番で形にすることにしよう」
「そっか。いっぱい読んでもらえるといいな。——じゃあ、俺はここで」
「今日はありがとう。上梨さんによろしく」
「ん」
　鞄をひっかけて、轟木君は去っていく。
　私はその背中を見送った後、静かな図書館の中で椅子に座りなおし、彼が並び変えた原稿をまとめて取り上げた。

――いつこの話が持ち上がったのか。

轟木君と私はそんなに交流のある関係ではなかった。彼に恋人――ガールフレンドがいると知ったのは遡ること八カ月ほど前、三年生の終わりのころだった。しかしその時は私自身に関わりがある話になるとは思いもしなかった。

四年生になり、工場見学旅行で偶然宿泊先の部屋が同じになり、私が小説を書いていることを知られた。知られた、といっても尋問されて聞きだされたのではなく、空き時間を有効利用するべく私が隠しもせず小説を書いていたから自然と知られたわけだ。その流れでなんとなく話をしていて、流れの中で轟木君は自分の話を小説にしないかと言った。

試しに話を聞いてみると、思いのほか面白そうだったから今回の企画が生まれた。彼の話は本当に取りとめがなくまとめるのに苦労させられることもあったが、逆に虚構的なスパイスを利かせることもできておもしろい出来になったかと思う。

別に小説を書いて出版社に投稿するわけではなく、私はこのようなウェブサイトに投稿する。要するに無責任の骨頂であるが、これを読む者の関心を惹けたなら幸いである。

この小説は、思春期の二人の男女による、ごくありふれた物語。ほんの少しの不思議があり、あとは特に変わったところのない話。恋といえば恋であり、友情であるというのなら友情であろう。とても曖昧で、とても儚い。揺れ動いて、危うい、未熟な人間だからこそ織り成す物語である。

foreword（後書き）

気軽にお読みになることをお勧めします。

M―oon（前書き）

自殺関係の話が苦手な方はご遠慮ください。

Moon

試験が終わり、年度も後半期へと入ったくらいだっただろうか。夏の短い北海道もまだ紅葉してはいないが、西から吹く風は乾いて冷たい、そんな時期。――小さい秋ではなく、冷たい秋だ。人々が感じるのは。特にこんな雨の日はそうだ、とかその日の俺は思った。

登校時間、校門の前でバスから降りて、傘をさして玄関までの短い道を歩くわずかな時間だけど、雨と一緒に降る冷気は身に沁みる。ぱつ、ぱつ、ぱつ、と傘を叩くのは凍った秋の欠片のように感じた。

見上げた空は重かった。

試験直後の授業は、答案返却に充てられている。授業の前には必ず生徒が期待したり憂いたりして、答案が返された瞬間には悲喜交々の声が上がる。総じて賑やかな時間が過ぎていく。俺自身の試験について言うことはない。大体が九割の点数を取っているので嘆くことはないし、だからと言って喜ぶことでもない。やったから、結果が出る。個人戦としてのテストなんかに面白みはない。

学校のペーパーテストが好きな奴がいるのだろうか、と俺は考えた。――もちろんいるだろう。授業がない「テスト期間」が好きな人間じゃなく、テスト自体が好きな人間が必ずいる。――テストが必要だと言うこととも違う。――そういう奴等は試されて、良い結果を出すのが好きだ。上の者に褒められ、自己満足し、下の者を公然と、昂然と見下す。尺度をもらうのが、そういう奴等は好きだ。測ってもらうのが好きだ。そこで秀でることは、大勢で椅子取りゲームをして椅子に座ったり立ったりする感覚に似ていると思う。奴等は、ゲームに参加しないという選択をすることはない。ゲームに参加しなければならない。――それが社会だ。

ゲームに負けることが恐ろしいと感じさせられる。――それが教育だ。
そして、俺もすっかり「教育」されていると思う。テストに反感を抱きながら毎度しっかりしっかり点を取っているのは、椅子取りゲームで立たされることが恐く、そしてゲームを止める選択をできないからだ。テストを受けるのは嫌いだが、これではテストが好きな連中と変わらない。そう、俺は自分を見た。
うんざりしてみた。
死んでみようかと、その年何度目かに思った。

＊

ぱたたたた
赤い口から連続的に溢れる液体は、しかし小さな世界の断崖となる淵からは、まるで落ちることを恐れるように少しずつ寄り集まり雫となって落ちて行く。だから水面を打つ赤い流れは断続的だ。
――これだけじゃ死ねない。
リストカットで死のうと思う奴は少ない、はず。これで死のうとするのは馬鹿だと思う。確実に死ねる方法を選ぶべきだ、本気で死ぬなら。腕を切るのは、血を流すためだ。――血を流して、柔らかくも鉄面皮な自分の皮の中に流れる熱い物を確かめたいからだ。――生きているんだと、知りたいから。
死を恐怖を持って退ける。
自殺は他人に迷惑をかける。だから、思いつきで死ぬのは良くない。

＊

「――腕、膨張しているわよ。それに、血液の芳香がする」
自宅のトイレを出たところで鉢合わせた姉サクヤに言われた。
午後九時にして早々にパジャマを着て寝る準備に入っているサクヤは、そのままトイレに入らずに、足を止めて俺をじっと見据えた。
――目敏い。そしてしつこい。
「自傷するの、禁止すると言ったわよね。何故止めないの？　――お父さんとお母さんに黙秘しているのは、もう中止にした方がいいかしら」
サクヤは俺の自傷癖を知っていた。――初めて知られたのは中二の頃だろうか。――だけど親には言わなかった。姉らしく、弟を想い、不必要に刺激しないうちに治そうとしているのだろう。俺はそんなサクヤが嫌いじゃない。偽善っぽいと思うけど、サクヤの心遣いは優しくて、嬉しい。――きっと、俺が自殺したら一番嘆いてくれるだろう。
力のこもった動作で、サクヤは俺の腕をつかんだ。少し膨らんでいると言われたそこは、トレーナーの下にトイレットペーパーを巻いてあった。もちろん、切った傷口を塞ぐためだ。掴まれて、圧迫されると痛みが走った。
「……ずいぶん深く切断したんじゃない？　何かあったの？」
サクヤは憂うような声で問いかけてきた。
「――なぁ――」俺は疑問を口にしようとした。
しかし、止めた。こんな質問を他人にするのはバカバカしいと思った。答えは予測できる。
「――」
「言えないの？　…………」
沈黙が訪れる。居間の方から、父母がテレビを見ながら談笑している声が聞こえた。
「死なないでよ。死亡しても、何も変化しないんだから」
生きていても何も変わらないさ。
そんなことは言わない。俺は黙ったまま、肯きもせずにサクヤの

黒い瞳を見ていた。やがてサクヤは茶色い後ろ頭を見せトイレに入って行った。
死ぬこともままならない。
生きることも、もちろんままならない。
その日は下らないことをいっぱい考えた。何で死にたいかって、くだらないことを考える自分を抹殺したいからだと最後に考え、俺はその日の分の思考を打ち切った。

＊

次の日、朝起きた時はまだ雨が降っていたが、学校に行く時間には晴れあがっていた。
雨上がりの空というのは気持ちのいいものだ。俺の席は窓際ではない。澄んだ青い空を見る時間は限られる。冷たいコンクリートの校舎の中、軽々しいプラスチックの机に俺はいらいらと就くことしかできない。――もっとも、こんな青い空は高すぎて、圧倒されて息の詰まるものを感じるから、見えないのが幸いかもしれない。
空気が冷えて乾いていた。昨日作った腕の傷が疼いた。昨日サクヤに問い詰められ、掴まれたことを思い出した。

昼、母の作ってくれた弁当を忘れたので、芋洗いする学食に行かなければならなくなった。　うんざりしながら人混みへと向かっていると、人混みの中で抜きんでていた、見覚えのあるクラスメイトの頭を見つけた。桂だった。こちらから何も合図しようとしなかったが、進まない行列に退屈してぐるぐると周囲を見渡していたあいつは、サバンナに立つキリンよろしく俺を見つけた。

「よお、轟。あとで合流しようぜ」

券売機の前できっかり一秒考え、弁当では絶対に有り得ない温かい蕎麦を頼むことにした。蕎麦は配膳も早く、時間のかかる定食を頼んでいた桂と同じタイミングで席に着くことができた。

「珍しい。いつも弁当だよな。弁当忘れたか？」

俺は肯いた。何も言わなかった。醤油だしの山菜の浮いた蕎麦を黙々と啜った。

「轟、高専祭で何かやるのか？　俺さ、学科展で鋳造の担当なんだけどよ、すんげえ大変なんだよ。放課後なかなか帰れねぇの」

高専祭とは高専の学校祭。外部の人間も招くから、学科ごとで展示がある。それが学科展。機械工学科の鋳造の展示準備は、毎年色々作るので作業が大変だと言うのは有名な話だった。――桂は知らなかったのだろうか？　俺はちらりと向かいに座る桂を見た。

「誰もいないからやろうなんて思わなければ良かったぜ。家に帰るの八時だぜ？　バスケ部に出る気も起きねぇ」

やれやれと頭を振りながら、桂は鯖をほじっていた。俺は蕎麦をすすった。

「――轟が何も言ってくれない」

「……」

「轟？　なんか今日は元気なくね？　ヘイミスタトドロキ、ハウビーンユー？」

「――？」

理解不能な英文を投げかけられた。それとも俺が知らないだけか？　――いや、これはきっと……

「How are you?」

「オー、ソレソレ。I'm very good! Thanks, and you?」

「Me ……too. Thank you.」

「『ミー』と『トゥー』のあいだに間があったぞ。ホントにか？　弁当忘れたことがショックなのか？」

俺は答えなかった。食堂の賑わいに意識を逸らしていた。
桂はそれ以上話しかけてこなかった。俺達は同時に席を立ち、食器類を返して食道を後にした。外に出ると秋晴れの空から、ちょっと温かい昼の風が太陽から降りてきた。
「……なぁ桂、生きる理由ってなんだ？」
「……。てん、てん、てん」
桂のユーモアらしい、と俺は解釈した。
「ないんじゃねえの？　難しいこと考えるなよ。こうして息して歩いてるんだから」

＊

生きる理由がない。
でも生きている。理由がなければ生きてはいけないということはない。
むしろ生きなければならない。
理由がなくても生きることはできる。なら、理由がなくても死ぬことは可能だろうか。
可能ではある。ようはその手段を取って結果として死を得るのだから。ただ、それが良いこととはならない。
昔読んだ古い漫画にあった。『泣く奴がいるから』と。――泣く奴がいるから、殺してはいけないのだと、人間を。
それは自分という存在にも当てはまると思う。自殺すれば人様に迷惑だとか、そういうこともあるけれど、誰かを悲しませるようではならないのだ。その責任を、死んでしまっては取ることはできない。
でも死にたいんだ。生きていたくないんだ。

死というものは虚無だ。そこに何も無い。他人も、自分も。思い、情報、記憶、記録、感覚、未来、過去、今、行き先、物質、世界、存在、温かさ、流動、ざわめき、広がり、エネルギー、全て無い。解放されながら、閉じ込められている。死は点。無次元の状態。何も無く、何もできず、何も感じられず、真っ黒い永遠が唯一、いやそれすら無いのかもしれない。でも……でも……吐き気すらないのは良い。倦む感じがないのがいい。喜びなんて泡沫で、泡がはじけたように苦い感情というのはこびりついているものだから。――全部、捨てたい。

思い通りにならないから。

――そういえば、シロガネも似たようなことを言ってたな。

＊

バン、バン、バン。

小気味良くリズムを刻むことが大事だ。

運動は生きていることそのものだ。胸の中にある鼓動が大声を出し、赤い命が身体中を駆け巡っているのを感じられる。

そして集中力。行き先（ゴール）を見据えて、迷うことは愚かだ。そこに向かうと決めたなら、全力を使うほかに何がある?

跳ぶ。水平の力を、一瞬で鉛直への力へと昇華させる。

「お……おっしゃー！　いいぞ轟！」

ボールは過たずポストに飛び込み、落ちてきた。まずまずのレイアップシュートを決められた。

「盛り上がっているみたいね。タケルは勉強だけじゃなくて運動もできるんだ」

コートに振り向こうとした瞬間だった。あり得ない声が聞こえた

のは。
　声の主を、俺は間違うことはなかった。背後にいたのは、外行きの競技用車椅子に、体育館というこの場所に合わせたような上下青いジャージ姿のシロガネだった。遠野さんもメイド服で同伴していた。
「ここ二三日のタケルの心の動きが変みたいだから、見に来ちゃった。喜んで？」
　シロガネの声はガランとした静寂に響いた。その静寂には、ついさっきまでいたはずの生徒達の人熱れが残っていた。――相変わらず、物凄い、謎な人払いだ。
「あ、そういえばまだ教えてなかったね。――私の周りに人がいなくなるのは、別に追い払っているわけじゃないよ。位相を、チャンネルを変えているだけ。多面体の世界の、他の人が立っていない一面に私が存在しているだけよ。ＭＭＯで同じサーバタウンが幾つもあるのと同じね。――タケルはいつでも、無意識に私と同じ位相に立つから不思議よね」
　不思議なのは、俺の心を読むように言動するシロガネの方だ。

「それで本題に移るけど……死んでみたいの？」

シロガネの声には面白がる様子が――無い。やわらかそうな桜色の唇には微笑の形があるけど、銀の輝きを覆い隠すような夜色の瞳には何の感情もない。
　俺は何も答えず、身体が冷えてきたことを感じつつ、車椅子に座るシロガネを見下ろして突っ立っているだけだった。
「今日のタケルは無口ね。――まぁ、私がちょっと浮世離れしたことをするとすぐそうなるけど。――死にたいなら死んでみればいいんじゃない？　タケルが死んだら、私、天使みたいに迎えに行ってあげてもいいよ。私には翼があるからね。……まだ見せたこと無かったか。……きっと瀕死のタケルは、赤い涙を流すよ」

シロガネの言うことはそれだけのようだった。遠野さんの手を借りず、小さな手の動きですばやく競技用車椅子を旋回させた。束ねられた黒い髪が踊った。
「……シロガネは、どうして生きてる？」
意識せず、俺は彼女に問いかけていた。
シロガネは車いすごと俺に振り返って答えた。
「死ぬために生まれてきたからじゃないからよ」
「……でも、人はいつか死ぬ」
「いつか死ぬのが恐いから今死にたいわけじゃないでしょ？　タケルは」
そしてシロガネは、びゅう、と風を切って姿を消した。
刹那、
世界の位相（チャンネル）が切り替わった。唐突に戻ってきた学生たちの声が、高波のように俺の鼓膜を強く叩いた。――時は止まっていたようだった。
「ロトー？　まだゲームは終わって無いぞ」
促され、俺はまたバスケットボールの試合に戻った。――生きる時間はまだ流れていた。

＊

月夜だった。
星夜だった。
そして闇夜だった。
黒い天には白い光があふれていたが、黒い地上には黒い闇しかなかった。空は澄んで、大きく円かな月の兎だかかの影が見えるのに、その光は弱く薄い。まるで天と地が切り離されているようで、居心地が悪かった。地面の上に一切の望みが転がっていないような感覚。死ぬ前だからこんな気分がするのだろうか。

時間は……確か午前二時くらいだったはず。丑三つ時か。家族が寝付き、トイレに行くように装ってそのまま家を出てきた。
目的地は近くの高層マンションだ。学校に行こうかと思ったが、冷静にちょっと考えて、止めた。家からどれだけ離れていると思ってるんだよ。学校には鍵がかかっているだろうし。行こうと思っているマンションにもカード式の鍵があるが、中学のころの友達がスペアを渡してくれているので問題ない。——その友達には申し訳ないことになるな。
真夜中とはいえ、行き道に街灯の光も、車の音も聞こえなかった。不自然だった。まるでゴムでできたトンネルの中を歩いているようだった。もしくは、深い森の中を通っているようでもあった。俺が歩いているのは札幌の片隅の街角ではなく、ただ漠然とした黒い砂漠だった。足の下にあるのが砂漠ではなく、アスファルトであるという違いしか俺は感じられなかった。
そしてそれは、俺にある存在を思い出させた。——シロガネだ。現実と隔絶されたような、与えられた幻覚。

——くっく………せーかい。

頭に声が響いた。俺の心の中の独白に答えるように。もちろん、あの声で。
ふ……と闇が動いた。——蝋燭の揺らめきのような、微かな風……………目の前にあったのは追分高専の校舎だった。
その校舎には扉という扉、窓という窓がなかった。人形の虚ろな硝子の瞳——眼球の抉り取られた屍の眼窩——そんな感じが、通いなれた建物から漂っていた。校舎には明らかに無機物でありながら、命のともしびがさっきまであったのだと訴える、有機物の惨たらしさがあった。
普通ならガラス（強化プラスチックかもしれない）の自動扉がある玄関をくぐった。

ホールには予想に反し、普段から貼られている掲示物が闇に曝されていた。非常灯の緑の光が明かりとなった。長椅子や学校のアイデンティティーみたいなオブジェもあった。リノリウムの床を歩くと、きゅ……きゅ……と足音が空しく響いた。

右手にある階段を昇った。三回まで、クルクルと。

廊下に入ると、赤外線感知センサーによって蛍光灯が点けられた。ドギっとした。白い硬質の光は、雪のようだと思い、それからはじめて、俺は秋の夜の寒さを感じた。空気は氷水のようだった。風花が舞っても不思議じゃない……冷蔵庫で作る、白く濁った氷に閉じ込められた気分になった。

校舎全体の中央に位置する階段だけが屋上に続いている。屋上は応援団の持ち場で、その扉（があるはずの場所）の前には旗だの和太鼓だのが置かれている。屋上への出口を塞ぐように置かれているそれらを引っ掛けないように注意しながら、俺は生涯最後となるはずの敷居を跨いだ。

屋上に柵はない。黒い空を吹きわたる秋の風が、隔ても無くこの屋上を駆け抜けていた。強い西風は絶望の匂いがした。

ここまで来れば、あとは死ぬだけだ。

俺は屋上の縁に立った。ぐわ……闇の手が俺の身体を揺さぶった。

――恐くはない。恐くないということは、つまらなかった。生きていた甲斐がなかった気がした。未練も、後悔も、ここに無いのなら何のために生きてきたのだろうかと首を傾げずにいられなかった。

――まぁ、いいか。

軽く、コンクリートの縁を蹴った。そうすると背中に当たっていた風が、俺を虚空の中に押し出した。

落下。――身体中の血液が逆流するような、無重力の感覚はその時にしか味わえない。

闇←

←

←
←
←
←
←
←
長い。
←
←
←
←
←
←
←
←
←
←
←
←
←
←

――光が迎えた。

＊

それを天使に喩えないのなら、比喩になど存在価値がないと思った。

わずかな淡色、貫くような灰白の光。後光。輝く身体。あくまでも黒く夜に溶ける髪。――槍のような白銀の眼光。

そして、翼。

闇の底から舞い上がってきた「彼女」は、俺の真下で急停止し翼を一打ちした。その瞬間、強烈な衝撃が逆上って来て、俺の身体の落下運動を止めた。空中で停止した身体を「彼女」は両腕に捕らえて舞い上がった。

――速い。飛翔は軽やかで、燕のように素早い。しかし加速度を感じなかった。全身を輝かせる彼女の腕の中はやわらかだった。しかし屋上を見下ろせる高みまで上昇した時、彼女は物を扱うように俺を投げおろした。

コンクリートに背中から叩きつけられたとき、俺はうめき声を漏らした。

仰向けの状態から半分だけ身を起こし上を見上げると、「彼女」が神々しく俺を見下ろしていた。澄んだ夜空に星々が無数に瞬いていたが、彼女の背景とあっては慎ましく星々は光っているだけだった。黒い空の中、一番の光を放ち夜を支配するのは「彼女」だった。翼が美しかった。銀色の光が結晶した羽毛の細かい双翼は、物質的な重さをまったく感じさせなかったが、それでいて鳥のそれのような有機的な質感を持って彼女の背で揺らめいていた。

「本当に死ぬつもりだったんだ。……覚悟はできてる？」

彼女の声は、少し離れているのに近くで話しかけられているように耳に届いた。

上空に浮かんだ彼女が降りてきた。接近され、はっきりと見る悪戯っぽさを感じさせる可愛らしい顔立ちは――間違いなくシロガネのものだった。が、その双眸の色は人の物ではありえない銀色。まさしく、白銀(しろがね)。瞳孔はなく、星を埋め込んでいるようにも思えた。

彼女が屋上の上に立った。――正確には、爪先は触れず、二十ミリメートルくらい浮遊していた。水平に開かれた銀の両翼は、シロガネの身体を重力から解き放っているようだった。

床に長座の恰好でいる俺の前でシロガネが腰を曲げ、淡く光る指先で俺の頬に触れた。体温が感じられなかった。単に触れられたという、現実感の薄い感覚だけ頬の皮膚を伝わってきた。

「私ね……したいことがあったんだ」

そう言う、シロガネの微笑に寒気を覚えた。――美しくて、妖しくて、危うくて。

「人を殺してみたかったの。死んでも良いと思っていて、多少の縁がある、そんな人を」

「シロガネ……？」

「なあに、タケル？」

「怒ってる？」

「ううん。全然。むしろ嬉しい。なんていうか、育ててた植物を収穫する気分かな、今。ちょうど私達が会ったのは春だし、今は秋だ

し、ホント、良い収穫時期だよね」
ぱん。
シロガネが俺の頬を平手で叩いた。単に皮膚と皮膚がぶつけられた以上の、静電気がスパークするような痛みが頬に走った。――とても痛かった。
「撲殺……でいいよね。その方が殺しているって感じがするじゃない。絞めるのは鳥みたいで良いけど、あっさりしているし。突き落とすのも、切るのも、味気ないしね。――ね、どう？」
笑いながら訊ねてきた。――本当に、心から楽しそうに。
「……うん。シロガネにまかせる」
――これは自殺というのだろうか。
俺が考えていたのはそれだけだった。
――ま、死ぬから何でもいいか。
俺が思考している前で、シロガネは、屋上に用意されたように落ちていたバッドを手に取って、その握り心地を確かめていた。彼女のために誂えたような、銀色の金属バット。バットで床が叩かれると、こーん……と小気味良い音が響いた。
「行くよー！」
助走――少し距離を取ったところからの滑空で勢いをつけて、バットを振りかぶったシロガネが飛んできた。
がつーん！　思いっきり殴られた。まさしく、殺す気で殴られた。打たれた頭がコンクリートの床に激突し、跳ねた。
どご！　と次は腰骨を打ち据えられた。床からの反作用で二重に痛かった。
足、腕、肩、頭、頭、腹、シロガネは次々とバットを振り下ろしてきた。
「うーん、倒れている人を殴るのは面白くないよね。タケル、立ってよ」
ふと、手を止めたシロガネが何気なくそう言った。だが殴られている方はそんな余裕はない。すでに身体は襤褸切れになった気分だ

った。
「ねぇ！　起きてよ。——まだ死んでないよね」
無邪気に、とても無邪気にシロガネは言う。
俺は立った。立とうとした。だが身を起して床に手を付いた瞬間に、シロガネは隙の出来た腹にバットを突き入れてきた。
う、と息の詰まる感じ。身体の中に臓器という袋が何個も入っていると実感できた瞬間だった。そのうちの、胃という袋は外部に繋がる食道を通して、圧迫されたことによる圧力を外に吐き出した。
有体に言って、吐いた。神々しい光を纏うシロガネの前で、俺は体裁もなく惨めったらしく嘔吐した。
口から胃液が垂れるのを感じた時、頭からも血が流れているのを知った。一通り吐いて、脱力して黒い空を見上げると、世界が回っていた。
そしてまたも衝撃。
ゴルフボールを打つかのような無造作なスイングだった。頬骨の尖った部分が砕けたように感じたのは気のせいだろうか。

「くっく……くくくく……あはははははははははははっはははh！」

シロガネの笑い声が、高く、早回しの音声のように響き渡った。
——信号の混乱した頭脳が、その音をエコーしまくっているように拾っていた。
「殺す、私がタケルを、人を、殺す、殺す殺す殺す！」
叫ぶ声はイレブン・ナインくらいの高純度で狂気に染まっていた。
しかしそれでも、シロガネの纏う銀の光は狂気とは無関係の清廉さだった。——純粋な狂気と清廉さの違いはわからないけど。
バットを振り回すシロガネ——天使(ミカエル)にバットを持たせるというのはパンクな感じだったが、俺には大天使に剣を持たせるのと同じように、素晴らしい組み合わせだと思った。——最高だった。こんな

姿を見ながら死ねるのなら何も悔いがないと思った。
やがて、内臓の損傷を強く感じはじめた。殴られながら血を吐き、血を吐きながら殴られた。身体は冷たく、熱かった。眼に映る世界は光にあふれ、闇に渦巻いていた。何もかもが混乱していたが、火を見るようにはっきりとした痛みと苦しみがそこにあった。
そしてすべては遠ざかり始めた。高波が一気に引くように、世界の沈黙は風よりも早かった。

?

朝日が顔を打ち、俺は目を覚ました。
鳥の声、近所の人の挨拶の声。遠くに聞こえる車の音は、街という生き物があくびをしているように聞こえた。
どうやら俺は自分の家のベランダにいるようだった。
全身が痛い。ひどく痛い。怪我はないようだったが服に血のにじんだあとがあった。
――生きながらえたみたいだな。
そう思った時、意識の底でシロガネの声が蘇った。――まだ殺しちゃうのはもったいないから、続きはまた今度、ね。――まったく、シロガネは俺のことを愛玩人形か何かだと思っているに違いない。

でも……それも悪くなかった。
　家に入ると、家族はまだ眠っているみたいだった。――というか、時が止められているような感覚。今の内に身支度しろということか。自室に入り、すばやく着替えた。血に汚れた服は――今度シロガネにでも送ってみるか。
　身動きするたびに身体が軋んだ。だがこの痛みが、俺がいま生きているということを叫んでいた。本当に、痛みとは悪くないものだ。痛みを知っていれば生きてられる。生きていれば、シロガネに会える。
　他にもあるだろうか？
　いま世界はどうなっている？
　不意に、世界への興味が沸いた。今日は楽しい一日になりそうだった。

A—che

春先に出会って以来、轟・タケルこと俺と、神無・銀ことシロガネとの関係は続いていた。
俺は土日になるごとに彼女の家に招かれる立場であったが、特にそれ以上の発展はなかった。別に何を期待しているわけでもないが——俺達は土曜日も日曜日も会い、どこに行くわけでもなくのんびりとｔｅａ　ｔｉｍｅを過ごした。無為ではあったが、悪くなかった。

この時は、まだ春になったばかりだろうか……

「はい、今日のお菓子はタケルの好きなチョコクッキーとミントのスコーンよ。お茶はインドの本場から輸入したアッサムの最高級品よ」
緑に金の模様が描かれた大理石のように綺麗な陶器のカップに、樹液のような黒いアッサムティーが注がれる。香りがふわっと漂い始めた。
「なぁ、何でチョコクッキーに『好きな』って形容詞が付くんだ、シロガネ？」
「あら、だってそうでしょ？」
「その通りだけど。……」
何故知っている？
ここでチョコクッキーを、そのようなｓｉｍｐｌｅな物を出されたことはこの日までなかった。シロガネのメイドさん、遠野・理暗さんが作るお菓子はいつも手の込んだもので、しかも菓子屋顔負けの味と見た目を誇っていた。だから俺も不満を抱くべくもなかったが。
チョコクッキーはシロガネの言うとおり、確かに俺の好物だ。仄かに甘いクッキーの生地に、甘さを引き立てるように加えられたチ

ョコレートがたまらない。見た目が黒いのが良いし、カカオのにおいも良い。チョコチップが入ってポリポリしているのが好きだし、入ってなくても柔らかく温かい食感が好きだ。
シロガネは不思議な女の子だ。俺が言わない俺のことも知っているような言動を時折する。家にはテレビも新聞もラジオもなく、世の中のことなんかどうでも良いみたいな顔をしているくせに、こっちが最近の話をしてもちゃんとついてくる。学校に行っていないが、ちゃんと高校生ができる分だけの勉強は習得している。——もっとも、高専は普通高校と勉強する内容が違うので比較が難しいけど。
「今日はお嬢様が手軽な物を作る様に仰られたので。——如何でございましょう？」
「おいしいです。——すごく」
いつもながら、遠野さんのお菓子には文句のつけようがない。カラッとした渋みのあるアッサムティーに、極上の甘味を持つチョコクッキーがｊｕｓｔｍｅｅｔしていた。
こういった感じで、俺はシロガネとの時間を過ごしていた。何を得るわけでもないが、俺は満足だった。シロガネと友達でいられることは良いことで、このまま、少なくとももしばらくの間はこの関係を続けていたいと俺は思っていた。
「そういえば、タケル、そろそろテストとか無いの？」
「あぁ、そうだよ。ちゃんと勉強はしているから問題ない」
「ふうん……タケルって授業はしっかり受けてるって感じだもんね。テスト前に改まって勉強しないって主義じゃない？　——でもねタケル、別に無理して私に呼ばれることもないのよ。来れないときは前日にそう言ってくれれば良いから。——言い忘れない限り問題ないから」
「うん、わかった」
俺は軽く返事をした。
だがこの時、シロガネの言ったことを俺は肝に銘じておくべきだったと、間もなくして俺は後悔した。

＊

試験が終わった土曜日、俺はプールサイドにいた。シロガネの家ではない。あの家にはプールもありそうだが、俺はあの家でお茶を飲む以外の行為をしたことがないし、これからもないだろう。眼の前にあるプールは札幌＊＊とかいう公共施設としての屋内プールだった。

人がいっぱいいいた。土・日曜日にこれほど多くの人を見たのは久しぶりで、お祭り騒ぎともおれの眼には映った。シロガネの家にいれば人に会うことなんてないから。プールには楽しげに泳ぐ人が行き来し、プールサイドには休憩がてら談笑する人たちがいた。賑やかで、活気に満ちていた。

俺はと言うと、泳ぐのは得意な方ではない、というか好きではないのでベンチでなるべくゆっくりするようにしていた。――そもそも、まだ夏にもなっていないのにどうしてプールなんかに来なくちゃならないんだ？

「タケル、なに枯れ果てた老人のように呆けているの？　もっと活発に遊泳しなさいよ」

妙に二字熟語が挿入された文の構成。俺の眼の前に赤いサルビアの模様がプリントされたビキニを付けた女性が現れる。――轟・日本の姉、轟・木花（さくや）だった。その名前は日本で祀られる神社の多い、火と山を司る女神コノハナノサクヤビメからとられている。北海道大学文学部に通う、日本語以外に五つの言語をｍａｓｔｅｒしようと努力する大学三年生だ。

「別にいいじゃねえか。サクヤが来たがったんだからサクヤが楽し

めば」
「あら、それでは私が嫌がる弟に無理強いして同行させているみたいじゃない」
違うのか？
確か「テストが終了したのだからたまには付き合いなさい」とか何とか有無を言わさず連れてこられた気がするんだが。
「枯れてるわよね。それじゃ彼女は当分できそうにないわね」
サクヤは大きな胸を反らせて俺を見下ろす。
弟の俺が言うのもアレだが、サクヤは中々に器量良しだと思う。胸は大きく腰は細く、尻も軽く突き出している感じ。白い肌は傷もなくきめ細やか。顔もそこらへんの人よりずっと整っている。――顔でいえば、シロガネの方が可愛いけど。短めの髪を軽いｂｒｏｗｎに染めているのも減点だ。
と、そう言えば今日は行けないということをシロガネに言っていない。まずい、もう二時だ。いつもならシロガネとテーブルを挟んで向かい合いお茶を飲みながら、シュークリームのような閉じられた世界を作っている時間だった。
「好きな子、いないの？」
俺の横の開いているｓｐａｃｅにサクヤが座った。――濡れた肌が俺の肌に触れた。
「サクヤこそ、俺なんか連れてこないで彼氏と一緒に来いよな」
「いないわよ、恋人なんて。男なんてうるさいだけだもの。――で、あんたは？」
「……俺、三年になってから土日出かけるようになったじゃん。何でだと思う？」
「何でって、まさか――！？」
ここで敢えての無言。サクヤは俺の肩をつかんだ。
「むう……あんたはもっと奥手だと思ってたけど。で、どうなの、進展は？」
「別に。まだ家に行ってお茶を飲むだけ」

「茶飲み友達！？」
年寄りめいた言われ様だった。――微妙に否定できなかったけど。
「そっか……仲良くしなさいよ」
「うん。でも今日さ、実は行けなくなったって連絡してないんだよね。しかもセル（訳注・携帯電話のこと）忘れたし」
「えぇ！？」サクヤの声はプールサイドに固く響いた。
「それは良くないわよ、タケル。約束を破ってるってことじゃない」
「しょうがないじゃん。大体、サクヤがいきなりプール行くとか言うから悪いんだ」
「私のせいか……」
やれやれとサクヤは溜息をついた。
「ま、明日おみあげと謝罪の言葉を用意して行くのね。女の子は怒らせると面倒よ」

＊

姉サクヤに無理やりプールに行かされた次の日の午後一時、俺はシロガネの家に向かっていた。シロガネの家は俺の家から自転車で十分くらいの場所にある。シロガネと交流を持つようになったはじめの頃はメイドの遠野さんが迎えに来てたが、恥ずかしいから止めてくれ、地理は覚えた、と言うと止めてくれた。その時は半ば見栄を切って地理は覚えたと言ったのだけど、実際自分の足で通ってみると迷うことはなかった。――しかし、それは何だか足が知らず知らず動いているようで、地図を描いて彼女の家に向かっているという感じはなかった。
そう、俺はよくわからない感覚でシロガネの家と自宅とを行き来していたのだった。
だからだと思った。この日、行けども行けどもシロガネの家に辿り着けなかったのは。いつも「なんとなく」で通っていたのだから、道を見失うこともあるだろうと、三十分街を彷徨ってから俺は結論

した。
六月の温い日差しを思いっきり浴びて、俺は自宅へと戻った。もう一度出直そうと思ったが、面倒くさくなった。とりあえず、シロガネに電話をかけることを思いついた。
しかし、電話番号が思い出せない。
家の設置電話にはシロガネを登録していない。セル（携帯電話）には登録していたような気がしたが、登録した人々のホログラムの顔達の中にシロガネの顔を見出すことはできなかった。
シロガネの世界から弾き出されたような、いやな感じがした。
発信と着信の履歴を探してシロガネの番号を探したけど、彼女への連絡を見出すことはできなかった。結局この日、俺はシロガネにコンタクトすることはできなかった。

土日が過ぎ、さらに三日経った。

毎日シロガネの電話番号を思い出そうとしてみたが、忘れたものは帰ってこなかった。
――あるいは、忘れさせられたか。
シロガネの怒りを買った俺は、彼女に繋がるための情報を奪われたのではないかと、そんなありえないことを機構学の授業中に思いついた。だけど、シロガネならそれくらいのことはやりかねない。彼女は常識というものから僅かに、確かに乖離しているから。
ならばどうするか？　このままシロガネに拒絶されたまま別れるか？　――俺は、否、と答えをだした。
ここままじゃだめだ。
それに俺の心はすでに、彼女の吐き出す銀の毒に中毒していた。今シロガネに会えなくなるなら、禁断症状だ。
俺はシロガネを探し出す決意をした。

＊

次の土曜日が来ると、俺は朝早くから起きて出かける準備をした。シロガネの家を探す準備。昨日のうちから彼女の家がありそうな高級住宅地を幾つかリストアップした。あとは自転車で虱潰しに見て回るだけだ。外はしどどに雨が降っているけど、この時代はシールド型の傘がある。転びさえしなければいい。

いぶかしむ母親を後ろに、九時に家を出た。セルと、昼飯用のパンをつめた鞄を持った。外に出て、自転車のハンドルに取り付けた骨組みだけの傘、「シールド傘」を起動させると薄黄緑の光の膜が雨粒を逸らしはじめた。俺は雨の中に走り出た。

走り始めると、夏の始まりの、醒めた紅茶のような生ぬるい風が俺とすれ違っていった。歩道に人はいない。車道には雨粒を跳ね飛ばしながら走る車が、当然ながらいた。

車が走っている風景は、はじめてシロガネにあった時のことを思い出させた。あのとき車椅子に乗ったシロガネは、水玉を宝石のように跳ね散らしながら俺に突っ込んできた。とても衝撃的だったあの瞬間。——懐かしむには、まだ近すぎるか。でも、あの時と違って、今は街路樹に白い花が咲いている。（名前は何だったっけ？）甘いにおいがする。

普段は全く用のない、初めて訪れた高級住宅地を俺は走り抜けた。どれもこれもお高く澄まして、でんと構えている。俺にとっちゃお城が並び立っているようだ。だけどシロガネの住む家には及ばない……俺はぼんやりと思った。しかしあの家がどんな外観だったか、薄ぼんやりとしか思い出せなかった。白かったり、扉のところに柱があったり……これでどうやって目的の家を探すつもりなんだ？　轟・日本よ？　でも不思議と気が滅入るような感じは一切なかった。俺のペダルをこぐ足は力を弱めることはなかった。

三か所ぐらい、「高級住宅地」といえそうな場所を回ってみた。気がつくと時間は正午を少し過ぎていた。

昼飯を食べようかと思ったが、その欲求はなかった。シロガネを探しているうちに思考がクリアーになった感じで、食欲とかの雑念が一切湧いてこなかった。まるで――彼女を探してなら地平線でも三千里でも、どこまでもいけそうな旅人になった気分だった。

一休みに立ちよった白樺の木の下で、俺はシロガネのことを思い遣った。初夏の雨は冷たい。しとじとと降る雨の下、シロガネは家の中にいるのだろうか？　それともこの雨の下にいるのだろうか――俺には理解できない理由で。

と、不意にズボンのポケットに入れたセルが振動し始めた。取り上げると、遠野さんのアニメみたいなデフォルメのホログラムが俺を見ていた。

「もしもし、轟です」

「タケル様、ご無沙汰しております。如何お過ごしでしょうか？」

――遠野さんも俺のことを下の名前で呼ぶ。

「えぇ、変わりありません。……あの、遠野さん、シロガネはいますか？　俺、その……」

「お嬢様にお会いになりたいのですか？」

遠野さんの平板な問いかけに、俺は迷わず答えた。――「はい」会話が途切れた。セルを耳から離すと、遠野さんのデフォルメが無意味に回転していた。

「お嬢様は憤られています」――ふいに遠野さんが言った。

「はい、あの――」

「お謝りになるのはお嬢様と向かえ会えた時になさってください」

「……はい。遠野さん、シロガネはそこにいますか？」

「いいえ、お嬢様は一人で藻岩山に参りました。多分、まだそこにおられると思います」

藻岩山――ここから少し離れているな。

「ありがとうございます。俺、すぐ行きます」

「左様で御座いますか。タケル様——どうか、お嬢様をお見捨てにならないでください」
見捨てられるのは俺のような気がするけど……
「はあ、そんな見捨てるだなんて。俺こそ、まだ……まだ、俺はシロガネと一緒にいたいんですから。今回も、俺がバカなことをしたから……」
「……そうでしょうか。——とにかく、お嬢様を宜しくお願いいたします」
電話を切った。
雨脚は少し勢いを減らして、湿っぽく降っていた。新たな場面に移るｉｎｔｅｒｍｅｚｚｏという感じの雰囲気だ。
藻岩山に向かうため、俺は近くの地下鉄駅まで走ることにした。

＊

青葉の季節が遅い北海道も、七月となればちゃんと木は緑になる。雨に濡れた木の葉は、光の弱い空の下で淑女のように輝いていた。
地下鉄の西十八丁目駅を降りる時は当然ながら一緒に降りる人がいて、ここに来るまでのバスにも一緒に降りる人がいたのに、山の領域と言える木々の合間に這入ったとたん一気に人の気配がなくなった。不自然。そして、ぴりりとした緊張感が身体を襲った。
登山道は歩きやすいが、空が開けていて、雨粒が降ってくる。シールド傘を自転車につけてきたままましてしまった俺は、登山道のすぐわき、木の下を隠れるように歩いた。
誰もいない山は閑かすぎた。雨音は聞こえるけど、単調で、短調。息が詰まりそうだった。自分の足音も、湿っぽくて良くない。柔らかい煎餅みたいだ。俺はこんな自然の物閑かさは嫌いだった。——どうせ静かなら、一切の無音の方が良い。機械的で、静物的な、死んでいる静寂が好きだ。だけどそれはシロガネには似合わないかも

知れない、と俺は思った。シロガネは物静かだけど、その裡に犇めく物を隠している。彼女の背後にはざわめく物がいる。
そして俺は、彼女の中の犇めく物の雫を味わった。――あの赤い銀の毒を。
そんなことを考えていたら、少し開けた平らな場所が見えてきた。――そういえば昔、ここまで来たことがあったと思いだした。良くわからない、霊廟のような白い建物がある広場。来たのは幼稚園の頃とかだっただろうか。
シロガネはそこにいた。木の枝がない開けた空の下、絶対の孤独を従えて、一人、雨に濡れて車椅子に座っていた。背後から見る彼女の姿は凛としていて、近寄りがたい威圧を放っていた。久しぶりに見るような、綺麗な黒髪が流れる後ろ頭。今日は束ねられてなく、黒い波の上で雨露が結ばさって宝石のように飾りとなっていた。
「――よう、シロガネ」
声を出す瞬間、心拍数がレッドゾーンまで早くなっていた。
反応がない。さらに近づこうとすると――
「近寄らないで。……私の領域に入らないで」シロガネは振り返らずに言った。
「――っ」
「どうしてそこにいるの？　私は誰もいないことを望んだ。私がそう望んだからには、声の届く範囲に誰も存在することはできないはずなのに。どうしてそこに存在するの？」
やはりこの人気のなさはシロガネのせいか。
いや、この状況を目の前の女の子が起こしたと、頭から爪先まで信じるほどシロガネを神聖視しているわけじゃないけど。
「……その、この間は悪かった。約束を破って何も言わなかったのは申し開きようがないけど……このまま、絶交なんて……嫌だ」
そう言って近寄ろうとすると、また遮られた。
「近寄らないで。――あんたは私の王国を乱した。身勝手に振舞って、私の期待を裏切った。そんな人は、私の王国にいらないのよ。

――帰って」
　恐ろしく身勝手な言葉。正義がない訳ではないけど、それにしてもこんな言い方はないだろうと思う。――けれども、腹は立たない。こんなふうにシロガネが今まで他人を遠ざけてきたであろうことは既にわかっていたし、それでも俺は、今はシロガネの傍にいると心に決めていた。
「ごめん」
「私は待っていたのよ。来ないなら、はじめから連絡してって言ったじゃない。せっかく私の領域に招いてあげたのに、タケルは私の言ったとおりに振舞ってくれなかった。私という存在を忘れて、自分勝手に行動した。だったら、はじめからタケルなんて要らなかった。どうして私の領域くらい私の思い通りにさせてくれないの？　私の領域を、王国を乱す存在は要らない。私は一人で良い」
「ごめん」
「来ないで……っ」
　あくまでもこちらを見ずに拒絶して、仕舞いに車輪に手をかけて逃げ出そうとするシロガネ。俺は拒絶の壁を突き破って、車椅子の取っ手を掴んだ。
「もう二度と、何も言わないでシロガネの家に行かないなんてしない。シロガネが待っていて、俺を招いてくれるなら、俺は必ず行くよ。――シロガネの王国に、まだいたいから」
「必ずなんて……できない約束は、しないで。――どうしてそこにいるの？　どうして私と関わりを保とうとするの？」
「何でって……シロガネが友達だからじゃない？　もしくは、シロガネの血を飲んだということでもあるけど。シロガネは不思議で面白いから、俺はシロガネを見ていたいんだ。シロガネがいないと、少し寂しい。本当に、ここしばらくシロガネに連絡するための情報を失くしていて、どうしようかと途方にくれたよ。俺はもっとシロガネと話がしたいし、たまにはゲームとかもしたい。遠野さんのお菓子もおいしいしね」

シロガネは何も言わない。ちょっと俯いて、長い前髪で顔が隠れてた。
俺はゆっくりと車椅子を押しはじめた。
「寒くない？」
夏といえど、雨に濡れては寒いはずだった。日差しは少ないし、風は冷たい。
「いや、そんな」俺がｖｉｒｇｉｎだからってからかっているな。
「寒いっていったら、どうするの？　抱き締めて温めてくれる？」
――「上着を貸してあげるよ」
求められたので、上着を貸した。Ｔ－ｓｈｉｒｔになると、やっぱり寒い。
白いチュニックを着たシロガネは、俺の赤い長袖をさも暖かそうに抱きしめた。
「タケルの汗の匂いがするわね。――ずいぶんあちこち歩いたのね。私を捜したの？」
「そりゃ捜したさ」捜さなければ、動かなければ遠野さんからの電話もなかっただろう。――「わかるのか？」
「あちこちの匂いがするもの。でも、私の家の近くの匂いはないね。全然見当違い」
「むう……なあ、シロガネの家はどこにあるんだ？」
問いかけに答えはない。
それ以上中身のある会話をすること無く、俺達はシロガネの家まで帰った。帰り道、移動機関にはちゃんと人がいて、俺は少しほっとした。――人がそんなに好きな俺ではないけど、まったく人気がないのは肌に馴染まないようだ。――シロガネは他の人に認識できないとか、そんな不可思議現象が起きるのではないかと少し思ったりもしたがそういうこともなく、人並み以上の容姿を持つシロガネと、彼女を連れる俺は周囲の人目を惹いていた。シロガネは冷然としていたが、俺は落ち着かなくって仕方がなかった。そんな俺を、シロガネが密かに嗤っているのが気配で判ったりした。だけど俺も、

こんなシロガネを連れて歩けることがちょっと自慢だったりした。

「おかえりなさいませ、お嬢様。――タケル様に御謝罪になりましたか？」

「……」

相変わらず白黒のメイド服を着た遠野さんが、そうシロガネに囁くように問いかけた。シロガネは彼女には珍しい弱気な面持ちで、俺の方を見た。

「いや、いいよ。俺が謝られることなんてない。――ていうか、もういいだろ、そんな話」

「でもタケルは謝ったね」

「別に謝ることは損じゃない。俺はシロガネが友達でいてくれるなら、それでいい」

しばし沈黙。

シロガネが近くに来るように俺を招いた。すぐ近くに寄ると、腕を引っ張られ俺は腰を屈めることになった。

頬に温かく柔らかい物が触れた。

びっくりして、弾かれるようにシロガネから離れて、しばらくして俺は頬にキスされたことに気が付いた。

「また、明日来るでしょ？」

「あ、あぁ……」

夕陽のワインのような赤い光に、シロガネの瞳は銅色に輝いていた。この陽は今は沈む。でもまた明日には昇る。その明日も。俺達の仲も、そうやってぐだぐだ続けばいい。

A—che（後書き）

一番書きたかった話ですが、うまくまとまったでしょうか？

J_unction

『春のはじめ、季節外れに降る雪は早咲きの桜の花びらのようで……』

なんて言ったら詩人気取りだろうか？

学校の帰り、俺以外だれも降りなかったバス停を離れて少し歩いてから、もう春のくせにどんよりとした、冷えた曇りガラスのような空を見上げて、俺はふとそんなことを考えた。

春、といっても北海道の春は遅い。桜は五月にならないと咲かないし、梅はあまりないし、道端にはまだ雪が少なからず残っている。春を告げるはずの東からの風も妙に冷たいし……あと何だっけ？

ま、いいか。俺はそう思考を結んで間近の自宅まで足を速めることにする。

俺の住む一帯は、子供のいる家庭が極端に少ないらしく、学校の終わる時間になっても帰宅する子供で賑わうことはない。すごく、ひっそりとしている。聞こえるのは霙が積もってバシャバシャになった路面を歩く俺自身の足音くらいで、一つ角を曲がって大きな道に背を向けると、車の音すら遠くなる。

寂しい？

そう……言うこともできるか。だけど、どうでもいい。友達と帰ることだけが人生じゃない。――友達を作ることだけが人生じゃない。

寂寞は一時だけ。今の俺に足りないものはない――

「――って、うわ！」

道の角を曲がろうとした瞬間、何か低いものが飛び出してきた。小さいから車ではなく、大きいから子供でもない。銀色の何か――。霙に濡れた路面を、シャー、と鳴らして急停止したその物体の正

体――車椅子に乗った女の子だった。
前後に少し長く、車輪が少し傾いた競技用の車椅子だ。乗っている女の子は俺と同じくらいの年だと思う。白いフリルのついたブラウスを着て、薄いベージュのスカートを穿いている。大きい眼、桜色のレースのリボンで後ろに束ねられた長い髪、整った顔……
その子は俺をまじまじと見ていた。それなのにこちらもまじまじと見てしまい、少し気恥ずかしくなった。

「ごめんなさい」

俺が顔を背けた瞬間、その子が言った。高くも低くもない、女の子らしい優しい声だった。
そして俺が何か言う前に、車椅子をかなりの勢いで反転させて、走って行ってしまった。現れたときと同じく、去る時も風か雷を思わせる素早さだった。

――四十五秒未満の邂逅。

あとになって思ったそんな言葉。その言葉自体は何かで聞いた言葉だったけど。
運命的と言えば運命的だった。車椅子で市街地を颯爽と駆け抜ける美少女、そんなものがこんな世界にあると考えたこともなかった。ましてそれに轢かれかけるなんてことがあるとしたら、それだけで何かの運命を疑わずにはいられないだろう。

そして運命というのは一回きりでは終わらない。

一週間ほど経った雨上がりの日、俺はサクヤ……姉の言いつけで、学校の帰りにいつもと違う場所でバスを降り、百均屋（百円ショップ）で買い物をしてから家に向かった。そこここにある水溜りには

雨上がりの空が青く映りこみ、鏡の街を歩いているようだった。俺はあまり散歩の類が好きじゃないが、歩いていて気分の良くなる日だった。
シャー、と自転車が水を跳ねながら走るのを見て、俺はその前に車椅子に轢かれかけたことを思い出していた。——あれは変な出来事だったと、その時はそんなふうに考えてた。
ふと気がつくと、周りに誰も人がいなかった。すぐ横の車道には車が走っているけど、その音が遠く感じた。家の近くならそんなこともままあるけど、その時いた場所は真夜中でない限り賑やかな場所だ。
変だと思い周囲を見渡した時だった。百八十度旋回したところで、ありえないものが、先日のあれが爆進してくるのが見えた。

「ちょっ——！」

身体に刻まれた防衛本能で、車輪のついた人を乗せた金属の塊を反射的に回避した。
すぐに振り返ると、車椅子はまたも鮮やかなパワースライドをして急停止した。おさげにされた女の子の髪がふわりと揺れた。
彼女は何も言わなかった。大きな眼で、無表情に俺をまじまじと見るだけだった。
その瞳は、すこし変わってると俺は思った。ただ黒いだけではなく、燻し銀のような色と煌めきを見せる瞬間がある。
こちらからも何も言えず、ただ黙って彼女が喋るのを待った。
「この間もお会いしましたわね」
「そ……そうですね。——……」
「——何か仰らないのですか？　『車椅子で激走するのは危険だ』とか」
彼女が口を開いても、相変わらず俺は何も言うことはできなかった。ただ俺は、美しいけど鋭い棘を見せる薔薇をじっと見るように、

彼女と向き合っていた。
「よろしければ、私の家にお越しいただけないでしょうか？　このお詫びもしたいですし、それに……」
彼女は言葉を区切って、笑みをつくった。それは俺に花が開くことを直感させた。
「この私が同じ人と二度もぶつかりかけるなんて、単なる偶然ではありえませんわ。あなたと私は出会うべくしてここにいる、そう思いませんこと？」
そう思う。しかし現実には知らない女の子と共感したことに凄く恥じらいが生じて、どうしようもなく逃げ出したくなった。
「……あ、でも、俺帰らなきゃ」と無意識的に俺はそんな風に答えていた。
「そんなにお時間は頂きませんわ。私の家は……そう、昔話で言う『近いかったのか遠かったのか～～／それは眉間と鼻の間ぐらいでもあった』という様な距離ですし」
この時、すでに俺は目の前の女の子のペースに絡めとられていた。逆らうことは考えられなかった。恥ずかしかったけど、言われるままに車椅子の押し手を握り、女の子が指し示すままに俺は知らない場所へ歩き始めていた。

＊

導かれるままに歩くと、気がつけば大きな家の門の前にいた。そこはまわりもお高そうな家が並ぶ、高級住宅地といった感じだったが、自分の家に近いだろうこの場所にまったく見覚えがなかった。やたらに煉瓦造りの家があったり道端にはプリムローズが咲いていたり、イギリスの童歌「マザーグース」の似合いそうな場所だった。もう少しここを密かに観察したくなったが、目の前の車椅子の彼女を見て、俺は黙って車椅子を押して目の前の門の中に入った。

柱があるマホガニーみたいな、ていうか砂糖菓子のようにふんわりと白い両開きの扉を開くと、庶民の眼には燦然とまばゆい玄関があった。綺麗で広い。車椅子の人間が住む家のせいか、しきいに段差はなく、滑らかに三和土と外界が接続されていた。

三和土の上に立つと、さて、と彼女が俺を見た。

「この車椅子は外用なので、そこにある家用の車椅子に乗り変えなければいけません。――お手を貸してくださりますか？」

「手伝うって……あの、もしかして……」

「あの、優しくしてくださいね……。こういう身なので、運動もせず重いかもしれませんが、どうか……」

この車椅子の女の子が言いたいことは、抱きかかえて乗り換えさせろということのようだった。

一般に言う、彼女いない歴十七年と八カ月の俺。女の子と手を繋ぐぐらいはあった気がするが、抱きかかえるなんて無かった。しかし相手は身体の不自由な人だ。変な意識をするのも失礼なので、頭をクリアーにして彼女の身体に腕を伸ばした。

彼女のきめ細やかな白い首筋に顔が近づくと、微かな甘い匂いがした。――男とは違う、女の子の体臭。女の子は砂糖や蜂蜜や、そんな素敵な物でできている……、とか考えてしまった。

スカートの上から注意深く膝の裏をとらえ、ゆっくりと彼女を持ち上げた。腕に抱えた彼女の身体は羽のように軽く、猫を抱えているような感じだった。俺の腕の中で、彼女は甘ったるい顔でこちらを見ている。何を考えているのかまったく分からない。俺は顔を上げて彼女から眼を逸らし、示された木でつくられた上品な感じのする車椅子の中に彼女を降ろした。

「ふふ……ありがとうございます。力持ちでいらっしゃいますのね」

「あ……いや……」

心臓がバクバクしている。しどろもどろで、何も言うことができない。――無理に話そうとしたら、何を言ってしまうかわからなかった。

俺が黙り、彼女も黙る。不意に沈黙が訪れ俺が気まずくなったとき、ぱたぱたと速足の足音が聞こえた。

「お嬢様……！　どうして私を呼んでくださいませんでしたか？
お客様、それも殿方にお身体を運ばせるなんてお戯れを……」
「リア、それを言うなら、あなたこそ私が帰ってきた瞬間に出迎えるべきでしょう？　ま……私は気にしませんけど。それよりお茶の準備をしてちょうだい。お客様にはお菓子をお出しして」

お嬢様と呼ばれた彼女が居丈高に話しかける相手、背の高さが俺と同じくらいの、白黒のメイド服を身につけた若い女の人だった。長いスカートに靴下を履き、白い手袋をしているのでほとんど肌の露出がない。瞳の色が赤いのが不思議。色素が薄いのだろうか？ちょっと縦長の顔、薄い唇を上品に引き結んでいる。

メイドさん（リアさんだっけ？）は、す、と頭を下げた。もちろん『お嬢様』に向かって。

「失礼を重ねてしまいました。どうか平にご容赦ください」
「ふふ……良い子ね。許してあげますから早くお茶の準備をなさい」

すばやい動きで姿勢を正し、メイドさんは回れ右して家の中に入っていった。

「駄目ね……、私を連れて行ってくれなくちゃ。――あの、お願いできますか？」
「あ、うん……お邪魔します」

俺はまた車椅子のハンドルを取り、彼女を押して豪邸の中に入っていった。

玄関から入る廊下は俺の想像を超えた広さだった。この車椅子の女の子のためでもあるだろうが、さすがは豪邸。少し薄暗い廊下はしっとりとした高級感があり、壁紙一つ取っても、ただ白いだけじ

ゃない柔らかい感じを持ったそれが品の良さを見せつけていた。
部屋がいくつもあり、突きあたりのドアを開くと、そこが居間のようだった。燦々と光が射しこむ居間は、過剰ではないくらいに広々としていてくつろげる雰囲気を醸し出していた。調度品の数は少なく、どちらかといえば寂しい感もある。しかし無駄がなく、洗練された感じがあった。
微かな匂いを漂わせる木のテーブル（ローズウッドという木だと俺は知っていた）を前に、テーブルと同じ素材のやたら座り心地の良い椅子に座ると、さっきのメイドさんがお茶を持ってやってきた。かちゃり、とソーサーが置かれた瞬間、俺の鼻を紅茶の深いにおい、花畑にいるみたいなにおいがくすぐった。
「ダージリンね。それもとっておきのものを出してきたのね」
「はい、お嬢様が誰かをお招きになるということは滅多にありませんので、飲みやすいダージリンでも一番のものを御用意させていただきました」
ダージリン？　いいお茶かな、と思う以外は何も考えつかない俺だった。色は澄んだ黄金色で、砂糖を入れなくてもすっと飲める感じだ。
四角いテーブルの差向いに座った車椅子の女の子が、また大きな眼で俺を見ていた。
「いかがですか？　お口にあいましたでしょうか？」
「うん。すごくおいしいです」
「――ですって、リア」
ありがとうございます、とメイドさんがこちらに向かって深々と頭を下げた。黒い頭に付けられた、真っ白なヘッドドレスがこちらに突きだされる。
そしてメイドさんは素早く姿勢を正すと、くるりと背を向け歩み去り、また現れた時にはクッキーやらのお菓子を詰めたバスケットを持ってきた。
「あ、これもおいしい」

自然と感想の出る味だった。

「あらリア、あなたも少しは料理という物が解るようになったのですわね」

「はい、お嬢様の御蔭でございます」

「？　リアさんは料理が苦手なんですか？」

「そうですわね……、決して技術に劣っているわけではありませんが、微妙な味遣いというのがリアは不得手なのですわ」

彼女は桜の唇にクッキーを押し込む。こりこりと、小気味良いような咀嚼音が耳を澄ませば微かに聞こえた。

「そういえば、まだ自己紹介をしていませんでしたわね。――あら、私ったら髪もまとめたままでしたわ」

髪を、という部分に反応してメイドのリアさんがヘアブラシを取り出した。

しゅる、車椅子のお嬢様が髪を束ねるリボンを解く。つややかな、まさしく緑の黒髪といった彼女の髪がサラサラと水のように流れた。リアさんがその髪にブラシを通すと、さらに髪の艶が増した。――なんていうか、なまめかしい。

「私（わたくし）は神無・銅蔵が一女、神無（かみなし）・銀（しろがね）と申します。神無とは神が無いと書き、銀はそのまま銀（ぎん）の一文字です。どうぞ、気易くシロガネとお呼びください。それとこれは――」

「メイドの遠野（とおの）・理暗（りあ）と申します。遠き野、理（ことわり）に暗いと書きます」

凛とした彼女、神無さんの雰囲気が眩しくて、俺は少し気圧された。

「俺は轟（とどろき）・日本（たける）。轟は一文字で、タケルは日本（にほん）と書いてタケルって読むんです」

「私の見聞が狭いせいか、珍しいお名前のように思いますが？」

「日本神話のヤマトタケルから来ているらしいです。父はそういうことに凝る性質みたいで、姉がいるのですが、姉の名前も木花（きのはな）と書いてサクヤといいます」
「まぁ、お姉様ですか。どのようなお方ですの？」
「どのようなお方、というか……」
――いい加減、敬語で話すのは疲れたな。
ずっと気になっていたことも含め、俺は切りだすことにした。
「そのまえに――神無さんは何歳って聞いていい？　俺は十七だけど」
「あら、それではタケルさんと同い年ですね。私も半年前に十七歳になりましたわ」
「じゃあさ、同い年なら敬語は止めない？　……いや、無理にとは言わないけど」
「――そうね。でもタケル、あんたも私のことを名字で呼ばないで。私のことはシロガネって呼んで。もしくはシルバーでもいいけど」
どきり。微笑む神無さんを前に俺の心臓が跳ね上がった。ちょっと前までのお嬢様口調をひっくり返したような砕けた口調が、親近感をレッドゲージまで倍増させている。
「……だめ？」
おまけに、神無さんは品を作ってそんなふうに聞いてくる。
「い、いや……わかった…………シロガネ」
「よしよし。じゃあ、タケル。タケルの話をしてよ。タケル自身の話、家族の話、学校の話とか」
テーマが定まってないな。
だけど黙っているのもアレなので、少し頑張ってみることにした。
「えと、まあ俺は十七歳で男で家は札幌で、あぁ高専に通ってるな。知ってる、高専？　追分にあるやつ。長く言うと高等工業専門学校って言って、色んな工学の勉強するんだよ。俺は機械工学科ってところに入ってる。機械工学科なのは別にロボットとか車とかが好き

だからじゃなくて、専門性が広いって聞いたからだな。色んな勉強がしたいんだ、俺は。――そういうと勉強が好きみたいに言っているみたいだな。まあ、あれじゃない。未成年であるうちはせいぜい勉強していれば良いかなって。俺って特に趣味もないから。――家族のことについて話すか。四人家族で、父親は物書きが趣味の公務員。母親は主婦。さっき話した姉は俺より四歳上で、文化系の大学で英語とかの勉強してるらしい。………」

　だいたい、このようなことを話した。

「学校は楽しい？」
「何もしてないよりは、退屈じゃない」
「友達はいるの？」
「口きく奴はいる。……家に行くこともあるから、友達とも言えるか」
「わざわざ普通の学校じゃなくて、高専に行って機械の勉強をしようと思ったのは、少しは機械に興味があるんでしょ？　タケルは専門性が広いからって言ったけど。じゃあさ、ネジの有名なメーカーって何か言える？」
　ネジ、ねぇ。
　すっきりした味の紅茶を一口飲んで、一つ思いついた。
「もしかして……『カミナシ』？」
　シロガネは我が意を得たりと笑った。――可愛い。
「そう、『株式会社カミナシ』。世界的にシェアを持つネジのメーカー。――もっとも、私はネジのことも、会社の経営のことも、何も知らないけどね。一つ確かなのは、あんたの前に座っている私は社長令嬢ってこと。――私のこと、聞きたい？」
「ん……俺が話したくらいには」
　俺がそう答えると、シロガネは前髪に触れたあと、そっと口を開いた。

「じゃあ、まず一つ。何で私は車椅子だと思う？」
今はあと少しで二十二世紀に届く時代、足が不自由でも何とか治す方法はある。社長令嬢ともなれば、金の心配をする必要はない。
「……わからん」
「それは私が治さないって言ったからで、親父もその私に強いる必要はないと思ったから。――私には翼があるの。だから足は必要ないの」
「翼……？」
「お嬢様、あまりお客様をおからかいにならないでください」メイドの遠野さんが言った。
「あら、本当でしょう、リア？　今は見えないから信じられないだろうけど」
シロガネはクッキーを一つ手に取り、こちらへ差し出した。俺はそれを受け取り、口に入れた。ドライフルーツの乗ったクッキーのおいしさが口に広がった。
「おいしいでしょ。リアが焼いたのよ」とシロガネ。
「うん、すごいよね。うちの姉もお菓子作ろうとするけど、これに比べれば全然大したことのないやつしかできない。遠野さんのクッキー、売れるよ」
遠野さんが俺に向かってお辞儀した。
「遠野さん、ね。タケルはリアが人間のようにいうのね」
「？　遠野さんは人間だろ？」
くすり、シロガネが嗤う。
遠野さんが白い手袋を外した。手袋の下は……人形のような、機械的な関節の目立つ手だった。
「言っておくけど、義手とかじゃないから」シロガネが面白がって言った。
「いや、でも……遠野さん、全然人間らしいじゃん。ロボットみたいに、機械っぽくない」
某有名漫画の原子力ロボットが生まれるはずだった二千八年から

七十年近くたった現在、ロボットというのも大分人間らしくなっている。でも、とても人間そっくりとは言い難い。姿形はともかく、立ち居振る舞いが変だ。擬似的な心は、やはり本物には遠い紛い物。でも俺みたいな庶民が知らないだけで、莫迦みたいな値段がかけられたロボットは違うのか……？

「悩んでるね。人形は心を持たない、そう思ってるんでしょ？　それは正解。コンピューターは心を作れないわ。だから、リアには私が心をあげたの」

「心をあげる……」

「まぁ心を持たせた分、少し抜けた部分ができてしまったみたいでね。冷静な顔しておっちょこっちょいなの。――今も、私に靴を履かせたままにしてる」

「「――！」」

俺と遠野さん、二人の（シロガネに言わせれば片方は人間じゃないらしいが）驚きが重なった。

すみやかに遠野さんはテーブルの下のシロガネの足元に潜り込み、靴を脱がせて玄関へと消えた。

しかし、シロガネはさっきからとてつもないことばかり言っている。……虚言癖か？

「信じてない？」

さらりと彼女は聞いてきた。

「信じにくいけど、そうなんだろ？　シロガネが嘘を言わないのなら、これは本当だ」

さっき、翼を持っていると言ったことも。

別に人を見る目があるわけじゃない。だけど、目の前の車椅子の女の子が嘘を言うような可哀そうな、弱い存在だとは思えなかった。

「嘘をつくのは弱いからじゃないよ」

シロガネが俺の心を呼んだようにそう、小さな声で言った。

「タケル、その親指の傷はどうしたの？」

彼女が目ざとく見つけた、俺の右手の親指に、縦に刻まれた傷跡。

つけたのは少し前だから、今はふさがって白い線のようになっているだけだ。
「これは……何でもない。紙で切っただけだ」
「嘘つき」シロガネが即座に言った。
そう、何でもない傷じゃない。でもこれは言うべきではない。
「あんたが嘘をつくのは、弱いから？」
「……自分が無敵だと思ったことはない。俺は弱い人間だ」
「じゃあ、タケルの言った理論はタケルの中では成立しているわけね。——私は強い人間なのね？」
「……」
答えられるわけがない。
「リア、ナイフを頂戴。それと、お茶をもう一杯、新しいカップで」
そっけなくシロガネは言った。
いつの間にか戻ってきていた遠野さんが、テーブル用の小さな銀色のナイフと紅茶を持ってきた。ナイフは彫金が細やかで綺麗だった。
「純銀よ？」
そう言って彼女は、新しく淹れられた紅茶の上でナイフのエッジを指先でなぞった。
白魚の親指の先から、赤い液体が流れた。俺に見せるように向けられた、ふっくらとした指の腹には、俺と同じように縦に長く傷が開いていた。違うところは、俺の傷は右手にあり、彼女は左手につけたということ。
「タケルは左利きなのね」
美しく開かれた親指から、赤黒い血液が柘榴の実のように零れ、紅茶の中に、ぽた、ぽた、と落ちていった。その音さえも、甘美だった。
しばらくして、シロガネは紙のナプキンで右手の親指を覆った。純白のナプキンが真紅に染められていった。シロガネは、自分の血を垂らした紅茶を俺に向けて差し出した。

「飲んで。強くなれるかもよ？　あんたが強いとみなした、私の血がこぼれているんだから」
シロガネは誘惑するように言う。
黄金色のはずの紅茶は、血液が混ざったことで淀んだ栗色になっていた。でも芳しいにおいはそのまま、濁った紅茶は妖しく渦巻いていた。
少したためらってから、俺はそれを一口含んだ。さっきまで口当たりの良かったダージリンが、千振茶のごとく苦み走っていた。そして金臭く、生臭い血の味。——どうしてこんなに強烈な味がするのだろう？　だが俺はそれをもう一口で一気に飲んでしまった。カップをソーサーに置くと、テーブルの向こうでシロガネが嗤っていた。

「じゃあ、そろそろ帰る？　今は五時だけど」

どのくらいいたのか。時間の感覚がまるでなかった。
窓の外を見れば、傾き始めた日が赤い波長を強くして差し込んでいた。
「うん……帰る」
「リア、タクシーを呼んで」
「い、いや、歩いて帰るよ」
「歩いてって、ここがどこだか判るの？　無理しないで、タクシーに乗りなさい。私の家はお金持ちだから気にしないで」
有無を言わさない状況だったので、大人しく従うことにした。
帰るとき、シロガネは俺を見送らなかった。遠野さんがタクシーが来るまで、俺と一緒に外に立っていた。
「また、会えるでしょうか？」
別れるとき、遠野さんは微かな声で言った。
それは期待を込めた呟きではなく、ある現象を感情を差し挟まずに観察するかのような一言だった。

＊

シロガネという女の子と出会い、別れてから二週間ほど過ぎた。それっきり何の連絡もなかった。それも当たり前――俺達は互いの住所すら知らないのだから。

彼女と話した一時は、泡沫のような気がしてきていた。だからシロガネと会えないことを不思議には思わなかったし、惜しいとも思わない。それが夢ならば、消えてしまうのが当然だから。しかしあの時飲んだ、血の混ざった紅茶の味は時々口の中に甦った。ほの苦く、生臭く、それでいて甘美な味わいのあるあの紅茶。――まるで吸血嗜好の人間になったような、変態じみた興奮すら俺は感じていた。そんな感覚に浸っている時、俺は目の前の現実と頭の中の妄想が乖離していくのをまざまざと感じた。――本当に、あれは夢のような一時だった。

そして、この日。いつもどおりの日々の流れとして、俺は学校に通い、そして帰宅した。家には専業主婦の母親がいる。小説を読んでいる母にただいまと言い二階の自室に上がったところで、電話のベルが鳴り階下から母が俺を呼んだ。

「タケ、神無って人から電話よ」

「――！」

びっくりした。

開きかけていた機構学の教科書をそのままにして、俺はすばやく部屋を出て階段を下り、母の手から受話器を取った。

「もしもし？」

「こんにちは、タケル。元気にしてた？」

歌うようなシロガネの声が聞こえた。

「あ、あぁ。……」
俺はうまく言葉を継ぐことができない。
「寂しかった？　寂しいと思ってくれた？」
さぁ？
寂しいと思うほど付き合いはなかった。だから、わからなかった。けれどシロガネの声を聞いて、心が僅かなりとも弾んだのは否めなかった。
「……少し」
「ふふ。ねぇ、タケル。私たち友達にならない？」
「――それはいいね」
あまり迷わずに答えると、回線の向こうのシロガネの声が弾んだ。
「そう、よかった。じゃあ今度の土曜日、リアを迎えにやるから。また紅茶を出してあげるわ」
紅茶、といわれあの血の混じった紅茶を思い出した。――俺はつばを飲み込んだ。
「ではごきげんよう」
言うだけ言うとシロガネはあっさり電話を切った。

J─unction（後書き）

車椅子で女の子が爆走している……という思いつきからこの物語がはじまりました。思いついた時はそれ以上つながりを持たせることはできなかったのですが、それからあった諸々のことを継ぎ足していったらこんな形に相成ったわけです。

S_leeping beauty

シロガネはぺったんこだ。
――じゃなかった。
シロガネは胸が小さい。
――でもなかった。
思考が混乱していた。何故？　……あぁ、そうか。
場所は俺の家の風呂場だった。上がったらテスト前勉強として、倫理でもやろうかと考えながら俺はお湯につかっている。そんなシチュエーション。
シロガネが闖入してきた。露出度の高い、小さい、サイズも小さい紫陽花色のビキニを着て。木製のお洒落な車椅子に座って。家の風呂場はバリアフリーではないが、あまり気にしない様子でゴトンと段差を乗り越えて入ってきた。
「な、何でシロガネここに……」
「何でって、時にはタケルの背中を流してあげるのもいいかなぁとか思いついて」
いやなことを思いつくもんだ。
いつも服で隠されている部分の肌が、陶器磁器のように白かった。その上に、烏の濡れ羽色の髪がかかって、たがいをｓｅｘｙに高めていた。――くらっとした。
「くっく、私の色香に惑わされているみたいね、タケル。――ねぇ、この下も見てみたい？　この下にある、白とも黒とも違う色を」
そう言ってシロガネは小さい胸を隠す水着に手をかけた――――

＊

夢だった。

朝、六時十四分。いつもより十四分の寝坊。そろそろ母が起こしに来そうな頃合いだった。俺はすばやく布団を撥ね退け、寝巻用のジャージを脱ぎ棄て家用のジャージに着替えた。

——朝から疲れる夢だった。

欲求不満で見た夢だと思うだろうか？　——たぶん、違う。今の夢は過去の記憶の再生だ。しかも、現実は小説よりも奇なりとか言うように、本当にあったことはこれより更にたちが悪かった。

あの時、シロガネは何も着ないで車椅子に乗って入ってきた。場所はシロガネの家だった。普段は完全無欠そうなメイドロボの遠野さんが、突然ミス——何も無いところでつまづくのは「ドジ」の範囲か——を起こし俺の頭にケーキと紅茶を落としたことが事の始まり。そして、風呂に入ってこいと言われ、ちょっと惨めな状態だった俺が素直にそれ聞いてしまったのが運のつき。シャワーだけ浴びてさっさと出ようとしていたのに、その僅かな時間にシロガネが現れた。

——続きは思い出したくないな。

別に何があったわけじゃないが。あの時ばかりは俺も焦ったし、きまり悪かったし、はっきり言ってあの時ばかりは怒りたくなった。怒らなかったけど。だがあの時見たシロガネの白い裸体が時々フラッシュバックするのも事実だったりする。腰が細く、綺麗なラインの身体だった——胸は小さかったが。Bくらいだったよな……。俺はどっちかというと巨乳くらいの方が……。

あぁ、くだらないことを考えた。

俺はさっさと自室を出て、階段でちょうど登ってきた母とおはようの挨拶をした。

「そろそろクリスマスだよな、日本（にほん）。なぁ、わくわくしないか？」

朝の食卓で父が唐突に言った。六時半、食卓についているのは俺とスーツ姿の父だけだ。

――前にも言った気がするが、轟家は父、母、姉、そして俺の四人だ。気儘な大学生の姉サクヤの朝は遅く、母はサクヤと一緒に朝食を摂ることになっている。

父は真駒内陸上自衛隊駐屯地に勤務する自衛隊だ。階級は忘れたが（ていうか知らない）英語とロシア語を使い、割と高い地位にいるらしかった。名前は忍代（しのぶ）。その字は日本神話で、ヤマトタケルの父である景行天皇の諡号に由来するらしい。父の名前は祖父が付けた。祖父の名前は……まぁ、今はいいか。因みに母はの名前は姫子。母方の祖父母も何を考えてその命名にしたのやら。

父は俺のことをタケルではなくニホンと呼ぶ。

さて、ドラマとかでは朝の食卓で父親役はモニターを広げ新聞を読んでいるのが一般的だが、目の前の父は違った。父は文庫本をテーブルに押さえて俺の方を見ていた。タイトルは『クリスマス・キャロル』。確か実業家がクリスマスは馬鹿馬鹿しいとか言って、三体の幽霊に脅かされる話だったな。――それでクリスマスの話か。

「別に……」

この状況でこんなふうに答えれば、次の会話は決まったようなものだ。

「何？　お前もこのスクルージのようにクリスマスなんて馬鹿馬鹿しいとか考えているのか？　……むう、家の息子にも精霊の訪れがあれば良いのだが……」

ほらね。

「クリスマスがどうでも良いことはないけど、今はまだ十一月だし。俺達、先にテストだし」

後期中間試験だ。――まぁ、俺にとっては大したことではないけど。会話の流れで言ってみた。

「もう十一月なんだぞ？　ケーキの予約は始まってるぞ？　街もクリスマス一色だ。おぉ、素晴らしいクリスマス！　メリークリスマス、ハッハッハッハ……」

朝からテンションが高かった。何故だ？　あの小説のせいか。…

…まぁ、確かに面白かったけど。
　俺は温度差のある空気を無視し、なるべく喋らずに朝食を終わらせた。
　父のことはあまり好きじゃない。父は自分の興味あることしか話さないし、興味と趣味のためなら仕事を休むことだって何度かある。自分本位な人間で、見ていてイライラする。自分以外の人間も自分と同じ興味を持っていると思いこんでいるような言動も嫌だ。父と被らないように朝食の時間を変えることを考えたこともあったが……それはアホらしいのでやめた。朝はゆっくりしたい。父は無視すれば良い。別に、好きじゃないが嫌いというわけでもないし。
　しかし——クリスマスか。

＊

　休日だったが、百ミリメートルくらい雪が積もったので除雪した。自動除雪機を使えば良いようなものだが、家の除雪機は家のブレーカーを落とすくらいに電気を使うのでなるべく使わないようにされているのだ。それにパワーがあるので、百ミリメートルぐらいでは使うに及ばない。
　雪かきのあと、英語の復習をして、それから十一時に家を出た。行き先はもちろん神無邸。神無の人間としてはシロガネしか住んでいないから、シロガネの家でしかないんだけど。
　雪はまだちらほら降っていた。真っ白い空の、こぼれおちる純潔の欠片のように。明るい空の中で雪は輝く花びらとなって地上に舞い落ちていた。ふんわりと積もったその上を、俺は長靴で踏みつぶしていった。風は冷たく、澄んでいて、雑音を孕んでも無く清浄の一言に尽きた。——こういう日はとても好きだ。
　雪空の下で、白いシロガネの家も真っ白に輝いていた。まるで砂

糖で固めたミルフィーユのようだ、とか思ってみたりした。
そんな雪のようなふわふわした気持ちでチャイムを鳴らしてみたが、出てきた遠野さんはびっくりしたような、困ったような顔で俺を迎えた。
「……何か、ありました？」
「いえ、その…………本日、お嬢様は加減が悪く……伏せっておりまして——」
「あ……そうですか。じゃあ、あまりお邪魔しない方がいいですよね。……」
滅多にない、奥歯に物が詰まったみたいに話す遠野さんと俺。会話が続かなかった。——これが男の友達なら、気兼ねなく「顔だけ見ていく」とか言えたんだけどな。——とか考えたら、顔で判ったのか遠野さんが言った。
「せっかくですので、僭越ながら、私がタケル様の御持て成し差し上げます。——お嬢様は眠っておりますが、顔だけでも御覧になってください」
居間に通され、ローズウッドのテーブルについて紅茶をもらった。何の紅茶かわからない、暗い水色をしていた。お菓子も出てきた。黒檀を四角く切ったような、しっとりしたショコラだった。
「——ん？」
紅茶を口に含んで思わず首をひねった。スッとして鼻の奥まで通る香りは良いとして、紅茶の味の奥に淀むねっとりとした味は何だろう？　いや、知らない味じゃない。——そうか、ウィスキーボンボンだ。
「あの、お口に合いませんでしたか……？　冷えた身体をお温めできるようにニルギルにウィスキーを入れたのですが」
「あ、いや変じゃないですが……俺、未成年ですし……」
お酒は二十歳になってから。
遠野さんは途端にうろたえ始めた。
「す、すみません。すぐに違うものをお出し申し——」

「いえ良いです。おいしいですよ。今まで飲んだことはないですけど、お酒を紅茶に入れるのは……とてもおいしいです」
慌てて俺が言うと、遠野さんはうろたえるのを止めた。——やれやれだ。まあ、あんまり入ってない感じだから問題ないと思った。
じっくり、ゆっくり紅茶とお菓子を味わい、それからシロガネの部屋に案内してくれるように遠野さんに頼んだ。

いつも使わない、屈折した廊下を歩いた先にシロガネの部屋があった。——そこまでの道はよく思い出せない。
廊下のドアを開けた先に薄暗い部屋。その中の洗われた骨のような不気味な白いドアを開けると、銀糸が織り込まれたレースの天蓋がかかったベッドが置かれた寝室。淡い珊瑚色のカーペットの上を遠野さんに後押しされて歩き、ベッドの枕元まで寄るとそこで眠る黒髪の女の子の顔を見ることができた。
初めてみるシロガネの寝顔は、見ていると恥ずかしさで背中がむずむずしてくるぐらいに無垢で、可愛かった。いつも話している時のシロガネは、悪戯っぽく、毒気を孕んだ大人っぽい表情をすることが多いけど、活動を止めて静かに眠るシロガネは、まるで深山に積もる白雪のようにｉｎｎｏｃｅｎｔだと俺は思った。微かに赤みのある白い頬、力を抜いてふんわりと寄り添っている二枚の花唇、猫の毛のような華奢で長い睫、前髪と交わった慎ましげな眉。——そのどれもが完璧で、完璧同士が調和し合って可憐さを演出するシロガネの顔は、まるで女神のようだと俺は思ってしまった。（もしかして、俺、痛い奴になってる？）
俺が見ている間、遠野さんは何も言わなかった。まるで、馬鹿な少年がうら若い乙女の寝顔に見とれているのを観察するように。——いや喩えでいう話じゃないんだが。——遠野さんの視線に気づいたとき、一気に気まずくなってしまった。
「……風邪、ですか？」

場を繕うようにそう言ってみた。
「いいえ。――……」遠野さんは言い淀んだ。
「そ、そうですよね。顔、赤くないですもんね……」
しばらく沈黙があった。沈黙にはそれぞれ全く違う理由があったようだった。
「……お教えいたしましょうか？　貴方様がご存知にないお嬢様のことを」
色素の薄い赤い瞳で俺を見ながら、遠野さんは静かに問いかけてきた。
答えは決まっていた。
「はい、教えてください」
「お嬢様は、毎年この時期になりますと長い眠りに就くのです。クリスマスの前には起きます。眠っている間は、おそらく、私が深く立ち入れることではありませんが、お嬢様は自身の中にある王国にいるのだと思います。きっと、この時期はお嬢様の王国の中でも重要な時期なのでしょう。目覚めた時のお嬢様は、何かを捨てたような、ぽっかりとした表情になっています。そしてそんな顔をして、クリスマスのお祝いのために参られます旦那さま――お父様と会うのです」
「……はぁ………そうですか」
先週会った時は、そんなこと微塵も匂わせてなかったな、シロガネは。ていうか、そんなことがあるなら言ってくれよとも思う。――言いずらかったのか？
もしくは、何か企んでいるか。
しかし起きた時に『ぽっかりとした表情になって』いるというのは気になるな。そんな顔で父親と会う、か。シロガネは父親のことが好きじゃないみたいだが、もしかして「嫌い」のレベルに達しているのか？　だが何をしてそんな顔をするのか。……気になった。
だが知ってどうするのか、俺はシロガネの寝顔を見て思った。シロガネの生き方に干渉するのか？

――いや、それはないな。

帰ろう、そう思って後ろを振り返ると、そこにいるはずの遠野さんがいなかった。二人きりにされていた。

もう一度シロガネの寝顔を見た。微かな寝息をたて、昏々と眠るシロガネの寝顔は変わらずｉｎｎｏｃｅｎｔだった。――俺は――気がついたら彼女の頬に唇を当てていた。

――おいおい！

自分の行動が信じられなかった。我に帰ってすばやくシロガネから顔を遠ざけた。そしてこれ以上わけのわからない行動を取ってしまう前に、俺は踵を返して部屋を出ようとした。

しかし、行動を妨げる小さな抵抗を感じた。絹と思われる白い豪奢な布団の中から突き出た白い手が、俺のジーンズの生地を掴んでいた。そして――俺は身体だけではなく、意識が引っ張られるのを感じた。

気が、遠くなった――

…………

＊

意識が戻ったとき、俺は石の地面の上にへたり込んでいた。コンクリートではない。平たく削った石をタイル状に敷き詰めた道。馬車ぐらいが走るなら問題ないが、自動車が走るには絶えないだろうという感じだった。

宵の入りの空。道を照らすのは篝火の明かりと、道に沿って建てられた石造の建物の窓からこぼれている光。

どうやら五百年くらい遡ってタイムスリップした揚句に海の向こうまで飛ばされたらしい。――なんていうのもアリだが、ここはおそらくシロガネの心象世界、シロガネが心の中に閉鎖的に築き上げた世界だろう。遠くに、夕陽を背に受ける大きく高い城がある。あ

れはきっと前に来たことのある城。ならばここは城下町といったところだろう。

　立ち上がり、城に向かって歩き出した。石畳に舗装された大通りの上には、多くの人通りがあった。——通り過ぎる人達は、ほとんど九割以上が男。ここが普通の場所ではないと確信させるようだった。——往来は賑わっていた。まるでお祭りのように。少し注意しながら周囲を観察すると、諸所に大きな杭に結び付けられた赤い旗や、乾いた血のような色の茨で編まれたリースがあったりした。リースはただ輪になっているだけじゃなく、中に時計を模った飾りが付けられていたりした。——どうやら、祭りは祭りでも、血なまぐさい祭りみたいだと俺は思った。

「よう、そこの兄ちゃん！　腹減ってねぇか？　喰ってかないか？」

　声をかけられた。フライパンの看板をかけた、食堂っぽい店の入口に立った太い腹にエプロンをかけた中年の男が俺に呼びかけていた。

　少し考えて、俺は金がないと答えた。しかし料理人は金は要らないと言った、祭りだから。

「今日は何のお祭りなんですか？」

　店に入って出されたのはトマトのラザニア。板状の麺がぼそぼそしていたが味はなかなかだった。

「えーっ、知らないのか？　今日は『時計祭』だよ。ほら、城の壁に付いた時計が十二時に近づいていただろ？　あれを戻すのに、みんなで騒いだりするんじゃないか」

「騒ぐと……時計が戻る？」

「そう、十二時（おわりのじかん）はまだだよーって時計に教えるんだよ。すると明日になれば……えーと、六時くらいになってるのかな？　で、また一年経つと十二時になるんだよ」

「はぁ……」

　シロガネの思いつきは時々理解できない。

「そうそう、そろそろパレードだよな。早く食いなよ。女王様の御

姿をみることができなくなるぜ」
「パレード？」
「なんだ、それも知らないのか。お祭りには、偉い人のパレードが付き物だろ？　『時計祭』は一年で一番大きな祭りだからな。女王様もそりゃ立派な山車に乗って城下をお巡りになるんだよ。――因みにな、パレードの噂を教えてやろうか。パレードについてお城まで行った奴はな、一生城で働けるらしいぜ。でもその代り、そいつは外とは一切連絡できなくなる。俺も女王様は好きだけど、一生城の中で暮らすのは嫌だから、そんなことはしないけどな」
がっはっは、と料理人は笑った。
――それって、生きて帰ってこれないってやつだな。
おそらく、そんなことは誰も考えないのだろう。もしくは、考えても口に出さないのか。
シロガネは何をしているのか？　俺はその疑問と一緒に、漠然とした不安を覚えた。――シロガネは碌なことをしていないのだろう、と。

「ほら、聞こえてきた。外に出るぞ」

再び出た外は、すっかり黒くなった空と宵闇のベールに覆われていた。けれど往来には小さな松明を持った人が何人もいたり、道を照らす篝火が燦然と燃え盛っていたので暗いということはなかった。そして、それらの明かりに加わって道の向こう、行進の音楽と共に投げかけられる血色の明かりがあった。
巨大な針鼠のような山車。おそらく針は時計の針なんだろう。高さは五メートルくらい。いま俺がいる馬車が三台くらい並走できそうな大通りの、半分くらいの幅をもった山車が人に曳かれて、ずり、ずり、と不気味に迫って来ていた。山車のてっぺんには歯車形の背もたれが付いた玉座が置いてあった。当然――そこに座っているのはシロガネだった。

薄い紅色の紗を何枚も重ねた、薔薇のようなドレスに身を包んでいた。頭には銀の台座に大きなルビーを嵌め込んだ、重そうなティアラを乗せ、シロガネは山車の上から眼下を微笑をもって見下ろしていた。

「女王陛下、バンザーィ」

耳を聾する人々の歓声。シロガネは手を振ることなく、ごく自然に歓声の波の中に身を置いていた。

俺はと言うと、なるべくシロガネが見てくれるように人混みの前に出てみた。が、気付いた。シロガネは眼下を見ているようで、その実なにも見ていないのだと。この凄まじい歓声も、耳には届いていない。――まるで剣山の頂上に閉じ込められた囚人のように、シロガネの姿が見えた。

「シロガネー！」

叫んでも、群衆の中で声は届きはしない。煌めく無数のビーズの中の、一粒の石粒みたいなものだ。

シロガネはそのまま行ってしまった。

＊

陽が沈んで大分経ち、もう空には残光も無い。しかし祭りはたけなわとなり、巷は人々の騒々しさで溢れかえっていた。俺は夜店で渡されたタピオカのジュースを手に、ぼんやりと城の方を見ていた。

――そろそろ行くかな。

元々シロガネが何していても関係ない、知らんぷりしていることにしたはずだったが、ここまで来てしまったからには一言ぐらい口を聞いて行こうかと思った。

――心配になってきたとも言っていい。

遠目に見ていた城の様子からして、「女王様」のパレードは終わった頃合いだった。シロガネが戻ったあと城がどうなるか知らない

が、とりあえず行くしかない。
　城下の祭りと、城の中で行われることは無関係のようだと、これまでに情報収集して理解した。城下ではサーカスをやったり、象をさばいたり、決闘の見世物があったりしたが、それらはお祭り気分に乗った市民たちが勝手にやっているだけだった。誰も、実のところ、城の中で何が行われるのかは知らず、城に行こうとする者も少ないようだった。一部の情報に寄れば、城は衛兵に固められて入れないというのもあった。
　山の斜面に建つ城へと延びる傾斜する大通りの上では、確かに進むほどに人が少なくなっていた。半開きにされた銀色に輝く巨大な城門の、そのルネッサンス調の細やかな装飾が見えるぐらいには、人っ子ひとりいなくなっていた。
　松明の光に赤く輝く銀の柵の前に、衛兵の姿はなかった。十メートルはあろうか門を見上げながら城に入ると、むっとしたにおいが鼻を通って肺に入ってきた。――血のにおいだった。身震いしてしまったが、足を止めることはなかった。
　城の壁の高い所に付いた、時計がよく見えた。火ではない赤い光に照らされた時計は、十一時五十五分で止まっていた。秒針が、針に止められた虫の足のように震えていた。
　誰もいない城前。血のにおいの漂う前庭。止まった時計。――これ以上ないロケーションだな。
　噴水を通り過ぎ、城本体の扉をくぐった。
　学校の体育館より遥かに広いホール。巨大なシャンデリア、途方もない壁一面に施された装飾、物々しく立ち並ぶ石像たち。誰もいない。俺はそこを突っ切って上を目指してみることにした。
「待たれよ」
　声は唐突に聞こえた。ホールの欄干から十人くらいの鎧甲冑姿の騎士が現れた。全員剣を抜き、俺の方に顔を向けていた。
「女王陛下は現在大事な儀式の最中であらせられる。関わりのない者が入ることは罷りならん」

「関わりはなくないけど。この夢の中でしか存在しないあんたたちと違って、俺は現実でシロガネ、あんた達の「女王」と友達なんだよ」
「シロガネ……？　女王陛下の御名はそのようなものではないぞ、平民が。とにかく、即刻立ちされ。さもなければ、ここで命尽きようぞ」
騎士達は俺一人を威嚇し、いつのまにやら俺の進路上に立ちふさがっていた。
近くで見る騎士達は、みな甲冑のどこかに血のような赤い染みを付けていた。――本当に、きな臭い状況だ。
「どけ……」
俺は前に出た。
「そうか。ならば容赦はせぬ」
「――！」
本当に斬りかかってきた。
白銀に輝く刃が、重い風切り音を立てて迫ってきた。当たれば死ぬ、その危険な刃の動きが、不思議とゆっくりとして見えた。
一撃は避けた。しかし十人くらいいた騎士達は、情け容赦ない感じで俺に迫っていた。
「本気かよ！」
次々と剣が振り下ろされ、俺はあたふたと逃げ回った。背中を冷たい汗が流れ、緊張で手足が震えるのを感じた。喉の渇きがうるさい。がしゃがしゃと騎士達が鳴らす甲冑の音が、耳にガンガンと響いた。
気がつけば囲まれていた。――このまま何もしなければ、間違いなく死ぬ。――さて、シロガネは夢の中で俺を殺すだろうか。
「どけよ……」
こんなｒｅａｌｉｔｙのない場所で死ぬ気はなかった。
騎士達は輪を縮め、剣を頭上に掲げた。餅つきでもすんのか、と言ってみたくなる状況。俺は一心に願う、進路が開くことを。――

現実ではいくら願ったって道が開くことはないが、ここは夢だ。道を開くこと、願うことを叶えるのは比較的容易だ。
「どけろ！」
バン、とホールに音が響きわたった。
ホールの大きな扉が開け放たれ、強い風がなだれ込んでいた。風は塊となり、俺の目の前の騎士を吹き飛ばした。
「何――！」「こやつ、まさか……」「面妖なことを！」
騎士達が剣を振り下ろしてきた。なかなか勘が鋭い。だが、剣が振り下ろされた、彼らの輪の中に俺は既にいなかった。はじめに倒れた騎士を踏みつけ、俺は前に飛び出した。
「待て！――――」
びょう、と風が吹き、騎士達の声は掻き消された。風は俺の背中を押し、俺は黒く足の長い絨毯の上を駆け抜け、長い階段を一気に駆け上がり、城の上へ走った。
上に上がるほど、時計の音が大きくなっていた。かち、かち、かち……でもそれは不規則に、喘ぐように響いた。階段のつきあたりの扉の前に立ったとき、時計の音は鐘の音くらいに大きくなっていた。
鋼板が縦横に重ねられた飾り気のない扉。開くと、そこでは何十人という人達が床に座り込み、一心不乱に腕に抱えた何かを磨いていた。
「……歯車？」
「あら、タケル。来たのね」
床に座る人々の間を縫って、女王様然としたシロガネが現れた。夢の中だから、シロガネは車椅子じゃなくて自分の足で立っている。さっき見たドレスと変わり、こんどはサテンっぽい青い生地の、あまり装飾の華美でないイブニング・ドレスを着ていた。蠢くような腹部の刺繍が印象的。シロガネは烏羽玉の髪を少しアップにし、開けられた耳にドレスと対照的な、淡い色の大きな紅水晶のピアスを付けていた。

「……えっと………」
とりあえず血なまぐさい事が起きているようではなかった。人が何人も、豪華なお城に集まって一心不乱に歯車を磨いているという光景は異様ではあったが、物騒な感じはない。
「くっく……心配した？」
「シロガネ、もしかして、俺のことはめた？」
いろいろ俺の心を乱すような状況を整えて、シロガネはまさか——
「遠野さんが言ってたことは、本当？」
「嘘じゃない？　親父とはクリスマスに会うのは確かで、食事の時に私から何も言ったりしなかったりするけど、別に人形みたいな顔して座ったりはしないよ」
「……この人達は、何をさせられているの？」
「時計を戻す時に、ついでに歯車を入れ替えるのよ。何でか知らないけど、私のお城の時計の歯車には汚れがつくのよ」
あぁ、そうですか。
何かもう気疲れして口を開く気になれない。

「カチカチと十二時に針は近づくよ
カチカチと針の胸は恋に焦がれる
カチカチと時は終わりに憧れる
あと少し　あと少し

ビクビクと人は終わりを懼れる
ビクビクと生け贄達はギロチンの下で首を出す
ビクビクと人は生きる未来も懼れる
終わりは嫌　続くも嫌」

シロガネが歌っていた。
「怒ってる……？」
「うん」

俺はシロガネの手を取った。そして、少し力を加えて扉の外まで引っ張って行った。
扉の外は、城の中ではなかった。シロガネの城下町を見下ろす、どこかしらない断崖の上だった。
「何ていうかさ……シロガネと遊ぶのは良いんだけどね……」
「ごめんなさい。タケル」
シロガネはあっさり頭を下げた。
「私、タケルをそんなに困らせるつもりじゃなかった。……楽しんでくれればいいって思ったんだけど……」
「……次からは手加減してくれよ。遊びは気軽にしたいから」
「許してくれるの？」
「友達だから……当然だろ？」
「うん！　タケル、ありがとう！」
シロガネは俺の腕に抱きついた。
「じゃ、帰るぜ」
「うん……そうだね。早く、早く帰ろう」
早く早くと、シロガネは妙にせかすように言った。それが少し引っ掛かった。しかしこれでやっと終わると安堵し、俺は祭りに賑わう城下町に背を向け、世界の外側のもやもやした中に踏み込んだ。
——だが、俺は後ろを振り返ってしまった。
後悔した。眼に映った光景は、城下町が紅蓮の炎に包まれているものだった。十二時の、世界の終わりだと、俺は理解してしまった。劫火に包まれた城下町を見下ろして、あの城だけが白々と輝いていた。

＊

死の影は世界の影
私の影は私の死

私の十二時もいつか来る
まわるよ　時計はまわるよ
終わりがはじまりになるのかな
私の知らない　知るはずない　新しい時代

……歌はまだ続いていた。
まるで、滅んだ世界を懐かしむように……殺した自分の心を、慈しむように。

意識が自分の体に戻ったとき、俺は眼を開くのが怖かった。自分の心を殺した彼女がどんな顔をしているのか、俺は見たくなかった。

シロガネはベッドの中で上半身を起こし、変わらない頬笑みで俺を見ていた。

S__leeping beauty（後書き）

一番苦労した話です。プロットを無視してみたり、文字数一万を超えて部分消去してみたり、苦労がありました。
「王国の風」では各話ごとの終わりをすっぱりさせているのですが、如何でしょう？

Ｋ｜ｉｎｇｄｏｍ

夏休みが終わり、この日は二学期の始まりだったと思う。
高専は昔から前後期制なのだが、前期を途中で区切ってしまう夏休みという物が存在し続けているというのは不思議だと俺は思う。しかし夏の一番暑い時に学校に通わなくて済むのは良いことだとも思う。温暖化が最高潮だった三十年ぐらい前よりは真夏日の日数も減って過ごしやすいはずの北海道だが、暑いものは何といっても暑い。夏は花とか蝶とか綺麗で賑やかなものもあるが、俺はどちらかといえばｆａｎｔａｓｔｉｃに物静かな冬の方が好きだ。寒さというのも五月蠅さがないし、雪はかかなければいけないようだけど、今は全自動の除雪機があったり財政の潤った公共組織が除雪機をバシバシ出してくれたりするので、冬がそう大変なものということもない。

「よー、ロト。元気にしてたかー。どっか行ったかー」

考え事をしていたら話しかけられた。相手の名前は桂・鑑也、同じクラス、背はこのクラス四十人の中で五番目くらいに高いが威圧感を感じさせない、人懐っこい雰囲気を持つちょっと変わってると思う奴。他人からはカツと愛称される。ちなみに俺がロト。トドロキ↓ロキ↓ロト、と変化生成された綽名は大昔のゲームの主人公を彷彿させる。
「よー、カツ。元気にしてたかー。どっか行ったかー」
そのまま返してみた。
「そのまま返すよなー」
そのままの返答だった。
「俺はどこも行ってないな。皆で一回集まったくらいだな」と俺。
「そっかー、詰まんないやつ。もっと遊びに誘ってやったらよかっ

た？　あれ以外にもボーリング行ったり藻岩山でロープウェイに乗ったりしたんだぜ」

「藻岩山か……」それは夏休み前に行ったな。ロープウェイは無しだけど。

「行きたかったか？　でも、そう言えばー……お前も人と会うからってしょっちゅう言ってなかったか？　……ん？　あれ……」

「あぁそれより、宿題はやったのか？　数学Ａとか微分問題の嵐で面倒だったよな」――ちょっと奴の思考を遮るように話題を変えてみた。

「宿題？　……何あったっけ？」

「……色々。見せてやるのは今申しこまれた分だけだぞ」

　桂は少し考え込んで、言った。

「全部貸して」

「却下。管理が面倒臭くなるから」

「うわぁー。ちょっと待って」

「待ってやらん」

　そう言うと、桂は如実にうろたえ始めた。そこに他のクラスメイトから宿題を見せてくれと俺に催促が入った。もちろん俺は又貸しはしないという条件で貸し出した。しかし

「待ってくれー。今なにやってないか見るから。俺優先だろ、勇者？」

　ロト↓勇者、だった。

「そんなことは一切ない。慌てるがいい、そして落ちるがいい」

　俺の台詞は、周囲から笑いという賛同を得ることができた。

『落ちる』とは留年のこと。普通の高校ではあまり考えられないペナルティーに、桂のような勉強に意力のない高専生は脅かされている。

「頼むよー」

「知るか」

　がやがやと賑わう教室。これが今の俺の小さな世界だった。

「どこも行っていない」とそれだけ言うと「何もしていない」とまで言ったみたいだけど、実際はそうじゃない――担当教官が毎回暴走する材料力学の黒板を見ながら俺は思っていた。それどころか、夏休みは札幌圏内ではあるが出かけることもあった。神無・銀と。それと遠野・理暗さんと。誰もいない大通り公園（ありえない）とか、誰もいないサッポロさとらんど（従業員どこ行った）とか。――あいつと出かけると無人の場所ばかりだ。――他にも、クガネと名乗るシロガネの同い年の従姉妹にもあったりした（そう言えば、俺の家にも俺自身の又従姉妹が来てたな）。仮装大会もどきのこともした。

まぁ今年の夏は充実していたな。

ちなみに去年の夏は家から一歩も出ないで、アンデルセンの作品を可能な限り読むという謎の企画をした。退屈ではなかった。

高専は夏休みの初日からｆｕｌｌで授業がある。でも、三日すれば土曜日だ。またシロガネと会える。快適なシロガネの家で何を話そうかと考えながら、俺は軸の捩り角に関する問題を解くことにした。

＊

そして週末の日。その日は、サー……と細かい粒の夏らしくない雨が、気鬱させるように降っていた。残暑が大気をむっとさせていて、この雨はまるで、暑さにやられた小さな無数の精霊が落下しているみたい、とか俺は考えていた。

シロガネの家に着くと、いつもどおり遠野さんが迎えてくれた。

「――？」

いつもと雰囲気が違う。挨拶して、さりげなく観察し続けて気付

いた。今日の遠野さんのメイド服は、いつもより肩などのフリルが多くスカートがふんわりしていた。スカートの淵は幅の広い花柄のレースが付いていた。端的に言えば、可愛らしい。遠野さんは密かにロボットだったりするが、見た目は若々しい綺麗な女性だ。堅実で飾り気のないメイド服が似合っていたが、こういった可愛い感じのメイド服も似合っていた。

「その服……良いですね」

そんなふうにさりげなく言うと、遠野さんは無表情に「お褒めに与り光栄です」と言った。しかし、遠野さんがこれということは、もしかして……

玄関から居間へと続く、少し長く薄暗いチョコレート色の廊下の先で、俺は予想通りの物を目にした。

「あ、タケル。今日も来てくれたね」

濡れたような色の木のテーブルを前に、シロガネは銀の車椅子に座って顔を俺の方に向けていた。しかしその服装は、リボンがあちこちについた白と桃色のワンピースドレス――サクヤ（俺の姉）がカタログを見せながら言ってたな――そう、甘ロリという種別に入る服装だった。烏羽玉の髪の上にも桜色のヘッドドレスが乗っていて、白い頤の下でリボンが結ばれていた。シロガネもどちらかといえば大人っぽいｃｈｉｃな装いが似合うし、俺が見る時は大抵そんな服装だけど、こういった甘ロリも似合っていた。――恐ろしいほど。いつも見ているｓｈａｒｐなシロガネとまったく印象が違う。なんていうか、変幻自在だ。女の子は百の顔を持つということか。

「やあ、シロガネ。……か、可愛いね……」

とりあえず褒めてみた。あれだけ可愛いと何も言わずにはいられなかった。

「そう？　嬉しい！　今そこで照れまくってるタケルも可愛いよ」

シロガネは心底うれしそうに顔をほころばせた。……本当に、可愛い。

「よせよ、からかうなよ。――男がこんなこと言うのは、すっごい

恥ずかしいんだぞ」
「そお？　可愛いなら可愛いって言えば良いのに。——ふうん、でもタケルは言ってくれるのね」
「まぁ……可愛いから素直に言ってみたっていうか……今日は何かあったのか？　それとも、これから何かあるのか？」
　俺が問いかけると、シロガネは妖しく笑った。
　質問には答えず、シロガネは俺に座る様に指図した。
「ねぇ、学校はどうだった？　今週から二学期って言ってたよね」
「あぁ……うん、いつもどおりだよ」
「みんな、夏休みに何処行ったとか何したとか話してた？」
「うん。そうだな。俺は何処にも行ってないって答えたけど。他の奴は遊園地に行ったとか言ってたな」
「遊園地」と白銀は復唱。——「やっぱり夏は遊園地行くよね。タケルも行きたかった？」
「いや、別に」ていうか、シロガネと行ったら無人の遊園地だ。おそらく遊具は動くまい。
「私ね、そんなこと全然忘れててさ。というより、遊園地って物を忘れてたよね。でもね、私も行きたくなったの。だからせっかくだし、タケルにはとっておきの物を見せてあげる」
　遊園地に行きたいという発想から、とっておきを見せる、と何故繋がるのかは不明。相変わらず掴みどころのないシロガネ節だった。
　とりあえずミルクを入れたセイロン・ギャル紅茶に口をつけながらシロガネを観察してみることにすると、シロガネは猫の顔のチョコレートクッキーを食べた後、自分の近くに遠野さんを呼び寄せた。腕を遠野さんの首にかけ、シロガネはぎゅっと立ちあがった。
「……！」
　遠野さんは引きずるようにして、シロガネを部屋の真ん中まで連れて行く。そのあと気遣わしげに離れる遠野さんを尻目に、ふらふらと直立したシロガネは、どこからともなく大きめのナイフを取り出した。メロンくらいは切れそうだ。美しい銀の輝きが放たれると、

窓から差し込む太陽の光が色あせ、退けられるようだった。シロガネは不安定な身体とは裏腹の、嫣然とした微笑で俺をみた。

「さぁ、腰を抜かさないようにしてね」

シロガネは右手で逆手に握ったナイフを、もう一方の腕に桜色のドレスの上から突き立てた。

ふつり、とナイフは布地を破り突き刺さった。やわらかそうな腕の肉にナイフは深く入り、血が滲んだ。

ナイフを突き立てたまま、シロガネは自分の腕を縦に割った。ナイフを刺した時も、抜いた時もシロガネは涼しげな顔をしていた。だが……傷つけられた腕からは痛々しく、吹き出るように血があふれはじめた。あっというまに桜色のドレスを赤黒く染めた血液は、布を重く濡らしてぼたぼたと床にほとばしった。

シロガネは手をこちらに差し伸べた。流るる血で真っ赤に染まった左手を。

「タケル、こっちに来て。じゃないと案内できないわ」

驚きで腰も抜けた感じだったが、身体は意識せずとも動いた。よろよろと立ちあがり、タケルという俺はシロガネの近くまで歩み寄り、その前で両膝をついた。

「くっく……別に、今日は血をあげるわけじゃないよ。欲しかったら舐めてもいいけどね……」

そうシロガネが喋る間にも、吹き出るように血はこぼれていく。だが当の本人は平気の平左という様子。

人の表面を流れるのは静脈の血だ。静脈の血は酸素分が少ない分赤黒い。しかしそれより深い所に流れる動脈の血こそ、真紅。紅赤……鮮紅……。真っ赤な血の色に魅入られていると、俺の鼻は彼女の血の匂いを嗅ぎ取った。

意識が朦朧としてきた。……まるで……どこかにつれてかれるようだった………。

――…………

「ヨモツヘグリは済んだ。……王国よ……開け、彼を誘え…………」

＊

感覚はまず、膝を床に着いている触覚から戻ってきた。でもこの床はシロガネの家の、ゼリーのようにひんやりとしたフローリングではなく、重々しい石の感触だった。

ざわめく周囲の空気を感じた。遠い人のざわめきを聞いた。粘っこくなった口内を感じ、俺は自分の身体という物を思い出した。

視覚というのは一番重要でありながら、戻ってくるのには時間がかかるものだと知った。やっと目が開いたとき、俺は自分がまったく知らない場所にいることに気が付いた。

俺がいる部屋は円形で、石をくりぬいたような感じ。石窟といった趣だが、床も天井も壁もちゃんと平面が出され角ができているから粗野なばかりではない。それどころか、天井にシャンデリアがかけられていた。その豪華なこと！　冬の銀樹の如く、繊細で、緻密で、精妙できらきらしていた。葡萄を思わせる、荒々しいあの形はバロックだろうか。

――城か、ここは？

そう思った瞬間だった、城のレイアウトが変化し始めたのは。壁は相変わらず剥き出しの石壁だったが、その上に色彩も踊るようなタペストリーが見えざる手で張られ始めた。円形の広間に、壁に沿って柱がずしんずしんと建てられていく。柱は鉛色で、天使だか悪魔だかの顔がレリーフにされていた。シャンデリアの眩しい天井は、その光を励ますように銀と金の装飾が蛇が這うような軌跡で刻まれ

始めた。そして気がつけば、俺の膝は豪奢なペルシャっぽい絨毯に沈み込んでいた。
　平凡な——といってもｒｉｃｈだったが——日本の家が、よくわからない西洋の城になってしまったが、俺自身の服装は変わっていなかった。もしかして、シロガネの甘ロリはこれの予告だったのか。……そういえばシロガネは何処に行った。城の内装に気を取られて忘却していたぞ。
「——やっと私に意識が向いたね」
　声、そして衣擦れの音。チェックの模様がついた岩の扉が開いていて、桃の花を思わせるアクセントを鏤めた朱灰のウェディングドレス並に豪奢なドレスを身にまとったシロガネがこちらに歩み寄っていた。——桃って、今は晩夏なんだが。
　しかし——歩いて？
「くっく……タケルには刺激が強かったかな？　でもほら、せっかくあんたを王子様役に選んであげたんだから、いつまでも腰を抜かしてないで立ってよ」
「————」
　絶句した。文字通り。口を開いても息が通るだけで声帯が震えることはなかった。
　とりあえず立ち上がると、さっきまで普通だった俺の恰好もついに肩に飾りのついた深い藍色の詰襟になっていた。……ていうか軍服かよ、これは……。革のブーツが重い。立ちあがると布地がピンと張って身体に緊張を強いられ始めた。
「……何が……あったんだ？」
　もはや甘ロリでもない、どこぞの（何処のだよ）お姫様みたいな格好のシロガネに、やっとのことで質問できた。だがそれを聞いた相手は、抱腹絶倒の高笑いを弾けさせた。
「はは、あー、ははは——いいね、タケルのその反応。可笑しすぎ。うん、それだけ反応してくれると嬉しいな。——ここはね、私の王国、そして私のお城なの」

「シロガネの、王宮……？」
何故か『王宮』なんて言葉が口を衝いて出た。
と、その時広間の小さめのマホガニーっぽい扉が開いて、燕尾服の知らない男が現れた。
「姫様、パレードの準備が整いました」
「わかりましたわ、バトラー。今行きます」
そう優雅な口調で答えたシロガネは、淑女らしくこちらに鈍色の絹の長手袋をはめた手を差し伸べた。
「来て、タケル。こっちで話をしましょう」

重い、獣くさい緞帳をくぐると、夏のものではない鈍い光と、野球場のような歓声に迎えられた。そこは一部屋くらいの大きさがあるバルコニーだった。御影石の床は爬虫類の闊歩する謎の絵が描かれて、手すりは黒檀に銀の彫金が施されたものだった。手すりの下の壁部分はアールデコの芸術なのか、仄白い陶器の柱が幾重にも蔦が絡まっているように重なっていた。
シロガネが黒檀と銀の手すりに手をかけ、バルコニーが臨む円形劇場を悠然と見下ろした。その仕草は一枚の絵のよう。黒く長い髪はまったく癖なく背中に流れていて綺麗だった。その背中は大きく開いて、彼女の陶器の如く白い肌が見えていた。背はそんなに高くなく、普通の日本人サイズだからこんな西洋のドレスが似合うのかと思いきや、シロガネは息をのむような着こなしを見せていた。さっきまで来ていた甘ロリをひっくり返したような、一見陰鬱な色合いのドレスだったが、シロガネはどれも同じように――いやまったく違く？――自分の装いとしていた。
「桃の花言葉って知ってる？」
シロガネがこちらを向いて、ドレスのレースに刺繍された桃花を示しながら問いかけてきた。

「……恋の奴隷」
「おしい！　かな？　私の正解は『私はあなたの掌中にある』よ。でもここは私の中、私の王国。『あなたは私の掌中にある』って感じね。どういうことかって？　文字通りよ。ここは私の心の中に作り出した王国で、タケルはここに招かれたの。どうやったかというと、それはタケルがこれまで飲んできた私の血の力。――ほら赤くならない。私の中から生み出された物をタケルは飲んだから、タケルは私の中に踏み込む権利を与えられたの。素敵でしょ？　タケルは日本神話を多少知ってるんでしょ？　日本神話でいえば『黄泉戸喫(ヨモツヘグリ)』に当たることよね、これは。
「ここは私の国だから、なんでもしたい放題。私はここの女王で、そこら辺にいるのはみんな私の心が作り出した僕。ここでは私が思うだけで色んな事が起きる。この目の前の円形劇場(アンフィテアトルム)では私が見たいもの、やって欲しい物が見られる。何にする？　パングラチオン？　マスゲーム？　サーカス？　それとも罪人の公開処刑？　く、くくくっく……」

シロガネはハイテンションだった。
とりあえず俺はシロガネの話の流れを無視した、俺が一番気になる質問をしてみた。
「シロガネ、どうして立ってるんだ？」
シロガネは目を細め淡く微笑した。
「現実では私の身体は確かに故障していて、必要以上に身体を弄りたくないから治さないの。そうすることで家に引きこもることもできるしね。でもね、私は車椅子の生活が好きなわけじゃ全然ないの。私だって勝手気ままに重力に逆らって歩きたい。たとえ翼があっても……。だからこうして私の領分の中では立っているのよ。納得？」
「あぁ……」
「じゃあ、ほら見てよ。とりあえずジムカーナでもやらせるよ？」

ジムカーナといってもパイロンのコースを車が走るオートクロスではなく、馬で障害物を乗り越えたりする競馬だった。
連銭葦毛の馬が十頭ほど、直径六百メートルくらいの円形劇場の中に入場してきた。その瞬間、劇場の中に卒然とコースが現れた。観客が湧き上がる。中世風な格好の、襞襟をつけた騎手が観客に向かって手を振り、俺達に向かっては帽子を脱いで一礼した。騎手はすべて男だった。観客席を観察すると、そこにいるのもほとんどが男だった。老いも若きもいて、世界中の人種がそろっているような感じだったが、人類の見本としては五十パーセントくらいの完成度だと思った。
「アニムスって知ってる？」
アニムスとは、心理学者ユングが考えた言葉で、女性の心にある理想の男性像みたいなもの……だった気がする。——もしかしてシロガネはここにいる男達が自分のアニムスだと言うのだろうかと、俺は先読みした。
はたしてそのとおりだった。
「ていっても、ここにいる私の僕は、あくまでアニムスのようなものを原料にして、希釈して加工して作り出したものだから、本来のアニムスからはずっと離れているはず。そもそもアニムスというのは女の男性的精神的側面で、それが理想かどうかはともかく、自己には認識することはできない。——て、そんなことはどうでもいいか。それとも、アレ？　タケルはもっと女の子が欲しいってこと？」
「いやそうじゃなくて……」
なんだか状況が途方もなくて、意識が呆然としてきた。そしてさらに、シロガネが悪戯っぽく、色っぽく迫りよってきて俺の腕を取った時、そんなに大きくないはずなのに巧みに強調された胸の谷間が覗いて、俺の精神は突きまわされたミルフィーユとされた。
それでも冷静を装って、俺は下で繰り広げられているジムカーナに意識を向けることにした。
曇り空の色をした連銭葦毛の騎馬は、その巨体を震わせてコース

を駆け回っていた。鞭のようなスピード感と、槌を振り下ろすがごとく衝撃。なかなかに迫力がある。車のジムカーナ、人の何倍もの重さがあるレースカーが疾走するレースにも、勝るとも劣らない迫力だ。

「うーん……タケルが見るんだったらもっと良い物があるんじゃ……？」

シロガネが一人不満げにぼやいていた。

これ以上心臓に負荷をかけることはしないでくれ、そう思った時にシロガネは思考の結論を見出していた。

「そう！　高専といえば『ロボコン』よね。私知ってる」

シロガネがそう言った瞬間、ジムカーナの進行が凍結し、塵を吹き飛ばすように撤収されはじめた。

『ロボコン』とは各高専にあるロボットテクノロジー部などと呼ばれるロボットを課外活動で制作する部活が、年に一度あたえられたテーマに沿ってロボットを作り競わせる行事だ。各企業からの援助があり、年末くらいにＮＨＫで放送されている。昔は北海道の高専の数が少なく、地区大会で競い合うことがないなどの理由で北海道のレベルは低かったが、三十年くらい前からの北海道の急激な成長に伴う二高専の増築に伴い、今や北海道の高専の勝率はかなり高くなっている。――が、俺はあまり興味のない事柄だったりする。

さて、目の前に展開し始めた光景は俺が知っている『ロボコン』――ではない。劇場の両翼の入り口から二メートルくらいの異形鋼材や大型のモーター、バッテリーなどが運び込まれていた。何十人もの屈強な男たちが、レーザー溶接やボルト締めで組み立て始めた。

――そのロボットは二機あった。もちろん、対戦させるためだろう。大型の――どうやら高さにして十メートルはある機械になりそうだ単純な骨組み構造の、銀色のボディーに、一方には赤、他方には青とカラーリングしてそれらは完成した。

巨大な腕と、巨大な足だった。上半身と下半身と言ってもいいが、特に上半身には頭も腹も無かったので不適切かと思われる。腕も足

も左右一対として組み立てられていた。腕が赤で、足が青。この二つはロボコンで行われるような障害物競走や金魚すくいをしてくれそうにはない。二つのロボットの機能はおそらくたった一つ――ぶつかり合うことだ。

円形劇場の両端、俺たちから見て三時と九時の方向に操縦者らしき者が立った。腕の操縦者は上半身に装着型のコントローラーを、足の操縦者は下半身にコントローラーを装着していた。そして十二時の方向に審判が現れ、試合開始の合図をした。

赤い両腕と青い両足が動き始めた。足はそのままバタバタと歩行していたが、腕の方はのそのそと地面を掻いて動いた。――実際の音響としては、足の足音が「ずしぃん、ずしぃん」という感じ、腕の移動音は「ずぅぼ、ずぅぼ」という感じだった。両者とも見た目分の重さがあるようだ。良く見ると、構造も理論的っぽい様子。――シロガネの想像力で出来ているとしたらシロガネの博識具合に敬意を示したいところだが、どうにもそうは思えなかった。何となくだが、俺はこれらの知識がよその心から運ばれてきたんじゃないかと、漠然と思った。そのシロガネは喜々としながらロボットの挙動を見つめていた。

それはさておき、「腕」と「足」は順調に距離を縮めていた。

初めに動きを作ったのは「足」だった。バランスをとる手がないのに器用に片足を上げた「足」は、「腕」を蹴り飛ばさんとその足を重厚な動作で振り抜いた。

キックは早い。が、「腕」の反応も早かった。移動を直ちに止め、左腕をあげてキックを受けとめた。ボディが押されたが、右手でその場にしがみついていた。

一方、キックを止められた「足」は今度こそバランスを崩した。絶妙な動作で蹴りだした右足を戻そうとするが、「腕」が手を高く上げて足を戻さない。そうしている間に、腕の右が伸び、「足」の地面に付いている左足を払おうとした。

どうやら、「足」の方が分が悪い。

「腕」が「足」を投げ飛ばしたとき、俺はそう思った。
しかしそのパワーバランスを取るためか、「足」には反則技が付いていた。――ジェット噴射だった。投げ飛ばされた空中で、「足」は尻に当たる部分からの噴射により姿勢を立て直した。
そしてそこからドロップキック。――超迫力。「腕」は大きく弾かれ、その移動跡は深く抉られていた。
「腕」の骨組は少したわんでいた。しかし壊れて動けなくなるまで戦いは続くだろう。
――いかれている。
となりでｅｘｃｉｔｅしているシロガネ。俺は気が滅入るのを感じて、目を閉じた。
あくまでも瞬きのために。
だがその瞬間、世界は闇の底に消えた。

＊

再び世界に光が生まれた時、そこにある風景はささやかな小部屋のものだった。
白が基調の、グレープフルーツの香りが漂う部屋。調度品はアンティークかつ少女趣味で、ほおずき柄のレースのカーテンはなかなか可愛いと思った。
細い足の純白のコーヒーテーブルを前に、俺は鉄製のワイヤーチェアーに座っていた。冷たい触感がした。テーブルにかけられた淡い紫のクロスはなにも載せていない。部屋には白い箪笥があったり、壁に小さな額縁があったり、殺風景ではなく、しかしごちゃごちゃしてもいなかった。居心地のいい部屋だった。
ふわ、――ほおずきのカーテンが踊った。カーテンが隠していた、下辺を床につける大きな窓から、車椅子に座ったシロガネが現れた。
シロガネはコスモスのアクセントが付いたワンピースを着ていた。

その下には何も着ていない。――何故かそう思った。――車椅子は茶色の木造の物で、シロガネが現実に室内用として使っているものだった。

「……楽しんでもらえなかったみたいね」

シロガネは寂しそうに言った。微笑していたが、影のある表情だった。

「いや、あの変なロボコン以外は……楽しかったよ」

つ、と沈黙は訪れた。音のない風がカーテンを揺らし、その微かな音が聞こえた。

シロガネが俺と向かい合う位置でテーブルについた。

「シロガネは……いろいろやりたいことがあるんだな。…………シロガネは、独りなんだな。……」

言葉が続かなかった。

しかしシロガネは、俺が表現できなかったところも聞き取った。儚く、花のようにほほえんで言った。

「私の事、哀れんだ？　――これまでずっと、私は私を一人であるようにしていた。リアはいるけど、あれは私の人形だから、厳密には話し相手にもならない。――現実は思い通りにならなくて、思い通りにしようとも思えなかった。自分の中に王国が作れてそこに閉じこもれるなら、私はそれで良かった。何も欲しくない。どうせ二十歳になれば私は孤独さえも束縛される。翼があろうとなんだろうと、現実を変えようとすれば骨が折れる。――でも、それはタケル、あんたに会うまでのことだったよね。――私は今、一人じゃない。タケルを友達にしているんだよね」

ごめんね、とシロガネは言葉を打ち切った。

『二十歳になれば私は孤独さえも束縛される』、それは将来を決めていないシロガネだから、彼女の父親が決めた結婚という未来。俺もあったことのあるその許婚者は、曲がったところの無さそうな全うな人間だった。年は俺達より五歳くらい上。しかしシロガネは必ずしもその人と結婚する必要はなく、望みさえあれば簡単に未来

は変わる。シロガネの言うことは、シロガネの中だけの悲劇っぽいストーリー。――だけど、俺はそのことを言わない。可能な限り俺はシロガネの人生に口出ししたくないから。責任を持ちたくなかったから、シロガネの傍観者でいようと思ったのだ。――それに、自分の可能性くらい自分で見つけ出さなければ意味がないだろう。

「……今日は疲れたから、そろそろ帰るよ。今度、ゲームセンターでも行こうぜ。色々教えるからさ」

俺はそんな、気易いことを言ってみた。

「タケルは他の人がいたほうが良い？」

シロガネの言うのは、彼女のやる不思議な人払いのことだ。

「ゲームセンターは賑やかなのが華だしねぇ……。ん、でも、シロガネの好きでいい」

「そう……じゃあ、考えとく。――じゃあね」

「あぁ、じゃあな」

K−ingdom（後書き）

桂君の紹介がないなと思ったらここにありました。話の順番をシャッフルするというのはあまり面白くないですね。

afterword

轟木君を見送った後、私は肌寒い図書館にだらだらと座って本を読んでいた。そして、さて帰ろうかと思ったとき、轟木君ではない誰かが私と向かい合う席に座って、私の書いた小説を読んでいることに初めて気が付いた。

「んー、いまいちかな。お兄ちゃんが“ウォーカー”だってことが書いてない。他にも核心的なことが幾つもあったのに、綺麗に除けて構成されてるじゃない」

「犇鬼（ひしめき）……」

「あー、その呼び方イヤー！」

それは私より三歳年下の女の子。短い髪をポニーテールにして、ジーンズ生地のジャンパースカートを着ている。太めの眉が元気そうな印象を与える。彼女は高校生になったばかりだろうか。ここの学生ではない。

「えっと、じゃあ目茱（めぐみ）ちゃん。どうしてここに？」

「ん、ちょっと仕事でね。すぐ帰るからお兄ちゃんには会わないで行くの。――それより、聞いてた？」

「あぁ、ウォーカー――界を渡る者、のこと、轟木がそれだってことか。――まぁ、今回はそういう現実離れした話はないようにしたからね。また、今度、目茱ちゃんを登場させる話の時にでも出すよ」

「ホント？　絶対だからね。じゃないと呪っちゃうぞ？」

目茱　（ちゃん）は小首を傾げ、可愛子らしくぶって言った。

――この子が言うと洒落にならんからな。

なんせ彼女は本物の陰陽師だ。古代の賀茂氏の流れをくみ、現実にファンタジーをやってる女の子だ。詳しくは言わないが、本気になったら絶対呪い殺される。――因みに、彼女の本名は犇鬼（ひしめき）・目茱（めぐみ）ではない。それは彼女の芸名みたいなものだが、いずれ書くだろう続編には彼女のことはこの芸名で載せるつもりだ。

実際、ファンタジーを書く時は目茱の世話になることが多いので、その恩義に報いるためにも注文は聞いとかなければならないだろう。

「でもさ、ちゃんと読めば話の順番は判るよね」と目茱。

「うん……確かにそうだけど、それは俺が加筆した分もあるぞ。轟木ときたら季節の話をするのは良いんだけど、夏の話をしているかと思ったら、いつのまにか秋になってることがあるんだよ。だから結局、俺が都合よく加筆しているんだ。あいつ、ロマンチストなわりに大雑把だからな」

「お兄ちゃんがロマンチストか……いいね、それ。今度古い絵巻でも送ったら喜ぶかな。――でも、この「神無」って女、ホント食わせ者だよね。どうしてこんな女が良いのかな？」

「はは、そうだね」

目の前の少女も、俺から見れば曲者だ。食わせ者ではないにしろ。

話すことに満足したようで、目茱は立ち上がった。

「じゃあ、行くね。お兄ちゃんに『愛してる』って言っといて」

「はは、俺から言っても冗談にしかならないだろうけど、まあ伝えとくよ」

――『お兄ちゃん』とは轟木君のことを指す。彼とは戸籍上、又従姉妹になっている、一応。

＊

と、一連の最後にこの話をつけて良かっただろうか？

お楽しみ頂けただろうか？　これを読んだ方が不愉快になっていなければ幸いである。

先にも書いたとおり、いつかまた続きを書きたいと思っている。轟木君から聞いた話はこれだけではないし、いま登場した犇鬼・目茱の話もあるから。好評であれば、次の話を書く時期は早まるだろう。まぁ、そうでなくともいつかは続きを語ることになる。

では、短いがこれをまとめとする。また再会を祈って。

追分工業高等専門学校、機械工学科四年二十四番、白崎・詞朗。

＞了＜

afterword（後書き）

何でこれを書いたんだっけか……というのが今の感想です。
今回はテーマも何もなしに、思いつきと書きたい衝動だけで書いてみました。おかげで先に作ったプロットを途中で無視しまくって痛い目をみて、プロットって大事だなぁとか思ったりしました。
そんな小説ですけど、気軽に感想くださいませ。
次はカリッカリのファンタジーを物語ろうと思っています。でもこの小説が好評だったらこっちの続きを書くかも――なんて無いかな？　あると嬉しいですけど。
これを読んでくださった方と再会できると幸せですね。

あ、思い出しました。今回は「ファンタジーじゃない普通っぽいお話を書けるかな」とか考えて書いたのでした。自分としては、その試みは果たせました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5356g/

王国の風〜a girl has a realm〜

2010年10月8日15時18分発行